

325
288

調
龍
叡
著

病牀に輝く法悦

京
都
聲
社
版

ニ 第 トツレフンバ



始



特230
668



病牀

以輝
く法
悦



小 序

高岡市水島病院々長水島政一先生は同氏が嘗て福岡醫科大學在學の當時から今日迄私の尤も親しい信仰の友であります。

氏は信仰の人である、故に氏の眼に映る病人は常に肉體の病人であるのみならず、それは心の病人として即ち無明淵源の大病人として眺められて來るのである。されば同氏の信念はさうしてもそれを捨て得ぬのである、而して又肉體の病氣がその精神憂悶の影響を受けて、その病氣の性質以上に之を苦み、或は立處に癒るべき病人が徒に長く病牀に呻吟するが如き、又その甚だしきに至てはこれが爲に遂に不幸の結果を來すことの少からざるを見ては單なる療病策として何等かの信仰に依て精神の安慰を得ることが尤も急なことであるといふことを痛切に感ぜられた譯であるのであります。

故に療病の第一義が精神の平靜にあるといふ點も且つ患者からその生命を托されたことの上に長いノ世々生々の因縁を思ふとき、ここに宗教上の同朋觀が強く起つて來る事に依て、さうしても自分も同一の信仰に住したいといふ思念の上から、患者の人達へこの念佛の信仰を預りたいの願心が燃え上つて來たのであります。

然しながら、人には各々その信する處があり、而して又勿論信仰は強ゆべきものでもないのである。されどこの病を癒さんが爲にも又永久の生命の爲にも、この信仰を勤むることが、醫師にしても將又自己の信仰にしても當然なことであるこの點から、之を小冊子として患者の望むに任せて讀ませたいの願望もなつたのである。而して之に共鳴した最初の一人が實に私であつたのであります。

私は種々な因縁に引かれて、臨牀の法話を試みるこゝが多いのであるが、その病人の精神轉換の偉大な結果は、折々奇蹟的に見ゆるほゞ、病の癒つた事實も少くない、而

して又さしもの苦悶憂惱が立處に消へ、愉快歡喜の人になつて最後の光を輝し、御佛の膝下へ進まれた人の例も亦頗る多いのであります。私の傳道三十年の體驗の上には實に幾百の實例を持つてゐるのである。故にさなきだに、これを筆にしたいこの願望を持つて居つたのに、時機茲に熟し互に郢匠になつて今やこの小著が出来たのであります。

尤もこの小著は、水島先生の所思を十分に現したいと思ふ考へもなほ私の所信をも思ふ存分に書きたいこの考へで、實は三百五六十頁のものになつたのであるが、編輯子が書物としての體裁も又印刷費の都合からして、整理の上になほ斧鉞を加へ殆どその半になつたのであるこゝを頗る遺憾とするのであります。

故に切角の水島先生の期待を裏切つたこゝは、實に申譯のないこゝであるけれども、然しながら之を手にして見るに、相當に自分の意を盡した様な氣もするので僅に自らを慰めて居るに共に、必ずや徒に病を恐れて煩悶する人、また惑ふて迷信の底に展轉する

もの、更に道を求めて病牀の冷さに懊惱する人達への一道の光となり、一碗の靈水な
つて、その迷闇を晴らしその枯渴を醫するこゝが出来ること信するのであります。

長い、陰雨から霽れて、赫烈な陽光がぐつミ照りつける此頃の天氣に、すうつミ生
き歸つたやうな心持がする様に、この小著が健康上の弱者である人達の心の中からその
陰鬱な濕つほい煩悶を取去つて如來の生き生きした靈光に接せられんことを念願して止
まないのであります。

昭和四年七月十四日

別府、森別邸にて 龍 叙

病牀に輝く法悦 目次

第一緒言

- 一、病人の心理……………一
- 二、病と生命……………二
——大論の語——病に對する人間の悩みと弱點——
- 三、癒る病と癒らぬ病……………三
——醫者と病人との上に於ける五つの場合——闇の中を探すが如き不安——
- 四、不安を一掃せよ……………四
——精神作用の病に及ぼす影響——
- 五、弱點一掃の徹底策……………五

第二養病篇

一、醫師を信頼せよ……………五
 — 醫師を信ぜよ — 醫師を信じ得ぬ人の悩み — 醫學的知識の障害 — 病院の綱渡り —

二、病と迷信……………七
 — 迷信は醫師を排斥す — 迷信 — 迷信に入る動機 — 精神治療と迷信 —

三、迷信には確固たる根底なし……………九
 — 功利的迷信 — 第一の迷信より第二第三の迷信へ — 迷信は疑を本とす — 信じて疑ひ疑ふては信ず — 強く信じて又強く疑ふ — 根底なき人の愚さ —

四、愚者の話……………一〇
 — 愚者の實際 —

五、迷信の最後の悲哀……………一四
 — 迷信の結末 — 悲惨な實例 — 恐るべき威嚇 — 進退兩難の末路 —

六、醫師への信頼と醫師の感激……………一六
 — 醫師への絶対信頼 — 稻垣博士曰く — 一松博士云はく — 諸岡博士云はく — 主治醫

への尊敬と信頼 — 主治醫への法文 — 七里恒順和上の話 — 住職は尙主治醫の如し —

第三 自 覺 篇

一、病を恐れざるゝ……………二三
 — 病の佛教的考察 —

二、人間の實相……………二五
 — 生老病死 — 雨の降る日は天氣が悪い — 夢物語の一説 —

三、病に對する執着……………二五

四、人生は夢……………二六
 — 人世觀の一種 — 豊臣秀吉の辭世 — 大集經に表れたる話 — 王位も乞食も共に夢 — 夫婦の歌詠者 — 病苦の軽減 —

五、運命への安住……………三五
 — 運命觀の安住は執着を離る — 因縁、業、果報 — 春夏秋冬 — 阿羅尊者 — 最高最尊の権力者 —

六、正しき運命觀……………四

七、執着を離るゝところに醫師を信賴す……………四
— 醫師を信じたる柔順なる青年 — 佛教的療養道 —

八、病を恐るゝの根本原因……………四七
— 病を恐るゝの根本 — 無明煩惱 — 佛道修行 — 一部分の悟 — 病を恐るゝは死を恐るゝなり — 死の苦痛と不安 —

九、死 苦……………五〇
— 五識明了位 — 臨終の愛執 — 意識獨存位 — 斷末塵 —

十、愛別離 苦……………五一
— 愛別離苦と臨終の愛執 — 愛別の苦とは何ぞや — 千代の句 — 一緒に居ることの出来る國 — 習慣上の儀禮 — 低級なる宗教思想 — 自己満足 — 自己中心 — 親鸞聖人と法然上人 — 目蓮尊者 — 大聖釋尊 — 愛の徹底と孝道 — 願作佛心 — 度衆生心 —

十一、未來の闇黒 — 地獄 — 極樂 — 如來……………五九

— 靈魂の問題 — 佛の存在の疑問 — 宗教的知識の缺乏と俗論の障害 — 無盡居士の話 —
— 一隅を上ぐれば三隅従ふ — 因果の法則 — 物質不滅勢力恒存 — 固體液體氣體 — 肉體は物質 — 精神は勢力 — 有形と無形 — 機械的運動 — 自然とは何ぞや — 智、情、意 — 進化と退化 — 科學者の慘忍性 — 流轉輪廻 — 淨業と染業 — 淨土と地獄 — 六凡と四聖 — 冷かな論理と温き實際 — 體質の問題 — 吉凶禍福成敗興亡 — 願回 — 天道是か非か — 側面的内面的の觀察 — 因果の道 — 三世因果 — 順現業 — 順次業 — 順後業 — 大盜盜跖 — 地獄の歌 — 地獄 — 人間の地平線 — 壽命、不具、痼疾、體質、容貌、禍福 — 悟梵波提 — 宿業免れ難し — 順現業の實際 — 小因大果 — 無責任の放言 — 眞剣な實際 — 内觀内省 —

十二、不安の除去……………八九

— 運命罪惡智慧慈悲 — 御親の佛 —

第四 信 仰 篇

一、死に直面して……………九〇
— 虹の七色 — 死の縁無量 —

二、病を業報と感じたる人……………六

—— 豊森別院勸定安川庄兵衛氏—— 罪惡の懺悔—— 業報—— 御報謝の終り—— 書簡の一——
書簡の二—— 病牀は極樂の門——

三、死に安じたる人……………二二

—— 死出の獨り旅—— 執着を超越して—— 修養の人—— 太田南畝の辭世—— 山田又助の辭世——
北條氏政の辭世—— 淺野内匠頭の辭世—— エリサベス女王の臨終—— 信仰の人—— 親鸞
聖人の法語—— 歎異鈔の文—— 臨終記—— 思出の記—— 追憶のまゝを——

四、死を樂みし人……………一四

—— 往生の信心に安住したる人の特權—— 死を樂しむ事が當然の歸結—— 伊藤貞子の病中生
活—— 病に對する感謝—— 病は私を淨土に運ぶ汽車—— 誓了院の臨終—— 遊戯三昧—— 法然
上人曰く——

五、凡てに感謝して死を迎へわたる人……………一五七

—— 一切の轉化と淨化—— 新江君子—— 第一信—— 三頼と三安—— 恩惠親に立ちて—— 第二
信—— 病院生活は退院後の豫備教育—— 宇宙は一大因縁の集團—— 君子の死—— 臨終記——
淨齋法尼——

六、凡てを如來の方便として受け入れたる人……………一九二

—— 痼疾の病人—— 如來善巧の方便—— 祖師聖人の和讃——

七、御親の如來と罪の子としての私……………二〇〇

—— 法然上人仰せられて曰く—— 恩愛と無常と宿業—— 理論を超越したる本願の大悲—— 口
傳鈔の文——

第五 結 尾

……………二〇四

以上

五十年前に亡くなつた祖父寛量は履善僧朗二師の芳躅を慕うて行軌の最も正しい人であつた。その僧分としての容姿と行動との嚴肅さが今尙眼の内
にちらつく程當時六歳の幼き私に強き印象を刻みつけたのであります。
思ふに今日迄私が聊かでも道念らしき衣を着けて居るこゝの出来るのは全
くこの祖父寛量より受けた感化であります。

この一編の底にはたしかにこの祖父の感化が流れて居るのであります。今
やその半百の年忌に當つて感更に深きものがあり尙且つ母順勝院貞猷法尼
の七回忌と姉貞如法尼の三十五回忌を迎へて層一層の思出が湧いて來る
のであります。

されば謹んで此の小著をその墓前に捧ぐるこゝ、致します。

昭和四年九月三日 鏡光院寛量法師五十回忌の正當

京都深草の聲社に於て 龍 觀 合掌

病牀に輝く法悦

調 龍 觀

第一緒言

一 病人の心理

其後御病氣如何でございますか、定めて御佛の御慈悲の下に靜かに御療養
の事とお察し居ります。

あなたも責任の多いお體の事故、この度の病氣について、いろ／＼とお
案じになるのが御無理もない事と思ひます。

縦令責任がないとしても人間たる以上誰か病を好ませう。一日も早く平癒
して健康の體となりたいと希ふのがあたりまへの事であります。

二 病と生命

億ふに病は私共人間の生活を切り縮め、幸福を奪ひ、最後には生命の城に肉迫せんとするものであります。然るに我々人間の上で一番大切なものは生命即ち命でありまして、これについて大論といふ御聖教の中には

大論の語

「たとひ閻浮に満つる無價の珍寶も身命にあたる事なし」と説かれてあるが、この意味はたとひ世界中の寶にでも代へられぬものが命であること云ふのであつて、この尊い所謂二ツとない生命を狙ふ所のものが病であるから、勿論この病と戦ひ、是を征伏して健康への勝利を叫びたいと念願するのがあたりまへの事でありまして。

病に對する人間の弱みと弱點

故にもしその病が割合に性質のよくないものでもなればなるほど、それだけその心配が多くなる筈でありまして、これが即ち我々人間の弱みであり弱點であるのであります。

三 癒る病と癒らぬ病

處がこゝにこの病といふ事を靜に考へてみれば先づ癒る病氣と癒らぬ病氣との二つがある事は言ふまでもない事でありまして、そして實は癒る病氣を癒らぬのではあるまいかと案ずる人もあり、反對に癒らぬときまつてゐる病氣をも尙癒るものと考へて、もがいてゐる病人もあつてあります。

かうなるとこの癒る病氣と癒らぬ病氣といふ事についての考方が次の様に分れてくるやうに思はれるのであります、一ツには醫者の方でも病人の方でも共にこの病氣が癒る癒らぬといふ事を知つてゐる場合、二ツには醫者も病人も共に癒る癒らぬといふ事のわからぬ場合、三ツには醫者だけが之を知つて病人が之を知らぬ場合、それから四ツには醫者がどこまでも快くなるものと信じて、しかもそれが快くならなかつたといふ場合、五ツには醫者は到

醫者も病人の上
に於ける
五つの場
合

闇の中を
探すが如
き不安

底快くならぬと思つて居るのに反對に快くなつた時等、その他いろ／＼とそ
の場合を考へてくると相當に病に對する考へがこみ入つて、そこにはまるで
闇の中を探しまはす様な不安が起つてくるのである、こゝに人間の弱點があ
るのであります。たとへば癒るべき性質のものであつて、醫者の方でも癒る
と斷言した場合でもそれが少し長びくやうな事になると、やはりそこにひよ
つとしたら癒らぬのではあるまいかといふやうな不安さが起つてくる、これ
も亦やはり我々人間の大きいなる弱點であります。

四 不安を一掃せよ

故に何れの場合に於ても是非共この不安を一掃する事が病氣に罹つた人の
上に一番大切な事でありまして、實は癒る病氣でもやはりひよつとしたら癒
らぬのではあるまいかといふ精神上の恐、不安、悩み等がその病のために非常
な不利益である事は云ふまでもない事で、たとひ癒らぬ病氣にしてもこの精

精神作用
の病に及
ぼす影響

神上の恐怖が非常な影響を及ぼして十年間生き得るものが五六年で死なねば
ならぬ様になつたり、又あまり苦しまないでもよい病氣がそれがために非常
な苦痛を覺ゆるやうな事は間違ひない事でありまして、とにかく何れにしても
この病に對する恐れ、驚き、不安、疑懼といふやうな凡ての弱點を一掃せね
ばならないのであります。

五 弱點一掃の徹底策

この弱點を一掃するに就て先づつと三つの方法があらうと思はれます。
第一、醫師を信する事(養病)、第二、病を恐れぬ事(自覺)、第三、信仰に入
ること(信仰)であります。

第二 養病篇

一 醫師を信頼せよ

醫師を信
ぜよ

醫師を信
じ得ぬ人
の悩み

醫學的知
識の障害

病院の綱
渡り

六
醫師を信するといふ事。それは多量の宗教味を含んで居るのであります。反對に醫師を信じ得ぬ悩みといふものは、實に外の見る目も氣毒な程でさういふ人は先づ病人につきもののひねくれた感情から、「こんな醫師では駄目ではないか」と疑ひ出してくるのである。それから又次には他の人から「こんな醫師があるが」とすゝめられた場合、すぐにそれに引きづられる事になり易く。而して又かういふ人に限つて僅少な醫學的知識が邪魔する場合は非常に多いのである。斯様な理由からしてあちらに迷ひ、こちらに迷ひ、所謂病院から病院への綱渡りを行ひ、醫者から醫者への顔見せをするといふ様な状態になつて、引きづり引きづられて安静療養の暇もなく、病も體もますます悪くするばかりであります。而してこの醫師を信じ得ぬ心の底には實に恐る可き迷信がひそんで居るのであります。

二 病と迷信

迷信は醫
師を排斥
す

迷信

七
迷信は殆ど病氣の附物であると云つてもよろしいもので、結極この迷信を絶対に排斥しなければ同時に醫師を信する事もできないのであります。迷信には種々なものがあり、又社會の凡ての物に殆ど迷信が附いて居ると云ふことが出来るのである。この迷信は文化が進めば進むだけ同じく進むといふ様な有様である。これはつまり人間の知識が或る最後のものに對した時、又大自然に對した時、何等の力をも、またぬといふ所から、(これが正しい宗教、正しい信仰にふりむけらるれば誠に結構な事であるけれども)どうかすると邪な方に入つて終に迷信となる場合が多いのであります。而してこの病氣について起つてくる迷信は病氣を癒したいと云ふ心が眞劍であればあるほど迷信も亦眞劍となつてくるのであつて、それまでゆかないが相當な功利

迷信に入
る動機

精神治療
に迷信

八
的な打算的な所からこの迷信が起つてくる場合も少くない。これは、無智な人が、多く、醫者に高い薬價を拂ふよりも、僅かの御祈禱料で神様に癒して貰はふと思ふたり、又は、「叶はぬ時の神頼み」と云ふ様なものがそれであり、何さま病氣を恐るゝといふ弱點即ち、是非癒りたい、癒らねばならぬ、又、周囲の人も是非癒さねばならぬと云ふこの隙間につけ込んで、かうすれば病氣がよくなる、かう信すれば病氣が癒ると勧誘するのだから、大抵の者がこの迷信に陥つて行くのであります。
尤も何れの時代に於ても、精神的治療とでも云ふ可き、即ち精神の力が病氣を癒し得る治療があるため、この精神治療とよく似た迷信が極めて多いのであります。ある精神の力によつて病が癒され得たといふ所からして、あらゆる一切の病氣がみな癒るといふ風になつて、そこにどうしても迷信が伴ふてくるのであります。

三 迷信には確固たる根底なし

功利的迷信
第一の迷信より第二第三の迷信へ

九
そもく迷信に陥り易い人にはこれといふ確固たる根底がないのであるから、例へばこの迷信の相手となつてゐるところの先方が自分より非常に強く出てくる時にはたちどころにそれに服従してしまふもので、かくして第一の迷信がさまで功力がなかつた時、又第二の迷信がそれよりもつと強く出てくる時は直ちにその第二の迷信に陥るのである。かくして第三第四と次から次へと迷に迷を重ねて迷信のドン底に陥つてしまふのであります。
そもく迷信は疑を本として居るから最後までこの疑のために引きづられて行くのである。この疑といふ事は結極信する事に根底のない事で、すぐに信するが又すぐに疑ふ、そして又すぐに信じて又疑ひ出す、かういふ風にゆくの迷信であるから、たとひ非常に強く信じて居るやうであつてもどこかに少しの破綻が出てくるとそれだけ又強く疑が起つてくる、そしてその疑の

迷信は疑を本とす
信じて疑ひ疑ふては信ず
強く信じて又強く疑ふ

苦しみに堪へかねて又その次のものを信ずるといふ事になつてくる、これを
總稱して迷信といふのであります。

根底なき
人の愚さ

そもそも根底をもたない人は、とにかく人の口につき易いもので、つまり
自分よりも知識や経験等がいくらか進んでゐる人にはすぐに従ふのでありま
す。そこでだん／＼とそれが次から次へと變つてゆく事は勿論の事でありま
す。

四 愚か者の話

この何等の根底なくして人のいふがまゝに動くといふ事の如何に哀れであ
り、愚であるかと云ふ事は今更いふまでもない事であるが、これについてこ
ゝに面白いおかしき一つの例を擧げてみたいと思ひます。

愚者の實
際

或る所に愚な親子がありました。或る時親爺はその子供を伴れて驢馬を賣
るべく市場へ行つて居りました。段々行つてゐると數人の女に出會ひました

その女たちは

「この人達はなんといふ愚な人だらう。このほりだらけの中を、歩いて行
かんでも驢馬に乗つたらいゝではないか」、
と言ふた。

これを聞いた親爺は、成程さうであつたと、すぐに子供をその驢馬に乗せ
たのであつた。かうして段々行く間に、五六人の老人達の居る處を通りかゝ
つた。さうすると、この老人達が

「見よ、あのなまけものゝ若い奴は、自分獨り馬に乗つて年のいつたお父つ
さんを、ごみだらけの中を歩ませてる。なんといふ馬鹿者だ、これ、馬
から下りぬか、さうしてお父さんをなせに乗せぬのか」
と言ふた。

そこで小供をおろして、親爺が馬に乗つて段々と市場の方へ行きかゝつ

た。さうすると此度は女と子供の集つてゐるところにやつて来た。

「この爺さんは、何んといふ無慈悲な爺さんだらう、あの哀れな子供を、ほこりまみれの中を歩ませて、自分だけが馬に乗つて行くといふことはなんと分らず奴だらう」

と言ふた。

そこでこの親爺は、成程さうだと思つたので、自分の後にその子供を乗せて、二人とも驢馬に乗つたのである。可哀想なのはこの驢馬で、汗をだくだくと流して進んで行くのであつた。間もなく、一人の男に出會つた。その男は

「おい／＼、お前達はなんといふ無茶な人だらう、こんな小さい驢馬に大きな男が二人も乗つて、見よ、可哀想に、驢馬は汗をながし泡を吹いてゐるではないか、お前達は、こんな馬鹿なことをして恥しくないのか、それよ

りも、お前達が驢馬を擔いで行つてやるんだよ」

と言ふた。

之を聞いたこの親爺は成程さうだなーと感心して、親子は馬から降りて、驢馬の足を二本ぶ／＼つて捧を通し、それを擔いで段々と町の方へ行つた。さうして橋の處へやつて来ると、そこに居つた澤山の群集が、口をそろへて、

「わあー……… 見よ見よ、二人の馬鹿者がやつて来たぞ、乗るべき馬を擔いで来たぞ、あ……… 馬鹿者が来たぞ、わあー………」

この群集のごつと上げた笑ひ聲に擔がれてゐた驢馬は喫驚して荒れ出して、それがため、馬は遂に河の中に落ちてたう／＼死んで仕舞ふた。さうして此の親子は何物をも持たずにすご／＼と我家へ歸つた。

これは、よく話される話で誰も知つてゐるものでありますが、つまり自分

に根底を持たぬと常に人の口につくばかりで、たう／＼失敗するものである
といふことを物語つたものであります。

この可笑な話によつても、自分に何等の根底のない所からして人の云ふが
まゝにつきまよふ事の哀れさ愚かさかはつきりと分るのであります。

五 迷信の最後の悲哀

迷信の終
末

尙こゝにこの迷信の最後の悲哀とでもいふ可き事は、この迷信が疑を根
底としてゐるところからしてたう／＼その最後が見るも哀れな迷の泥の中に
落ち込んでしまふ事でありませう。

悲惨な實
例

これについて私 はかういふ悲惨な例を知つて居ります。それは關西のあ
る市に起つた事實であるが、かれこれ十四五萬の資産を持つてゐた人の只一
人の後繼の二十になる娘が肺病にかゝつた。金のあるまゝあらゆる病院や名
醫の治療を乞ふた事は勿論であつたけれども、この両親は日頃から極めて迷

信の強い人であつたため、反面に又所謂迷信の限りをつくしたのである。そこ
ろが、この娘の肺病は極めて性質の悪いものであつたために、だん／＼悪く
なるばかりで更に効がみわれない。そこで所謂叶はぬ時の神のみとなつて、
終に益々一生懸命に神に祈る事になつたのである。さうして殆ど全部の資産
をその神への祈禱のため投げ出したが、却つて、祈り祈禱が害となつてこの娘
は遂に死んでしまふた。そこで限りもなく悲歎してこの事をその祈禱者へ訴
へた時、

恐る可き
威嚇

「それはあなたの祈る心に誠がたりなかつたために神の心になはなかつた
のである。そこであなたの娘は死んだのだ。今あなたがそんな不足らしい
心をもつてゐると娘の命だけでなく、あなたの上にも神の御罰があるかも
しれぬ、故にあなた方はますます懸命になつてこの神を信せねばならぬ」
と嚇した。かうしてこの人達は一方には凡ての財産を失ひ、一方には最愛の

娘をなくして、精神にも物質にもほんとうにどん底の悲しみに沈んでゐたのである、この時私はこの人の親類の人によつて始めてみ佛の話をして慰めたが、何んとも云ひやうのない氣の毒な感じにうたれたのであります。

斯様にこの迷信の結果は、假に病氣がよくなつたといふ場合には非常に結構な事のやうにも思へるが、しかし今擧げた例のやうにゆきつまつた場合には、トリモチ桶に足をつき込んだ如く進む事も退く事もならぬ様になるのである。即ち進んでは神の心になはぬといはれ、退いては祈る心に誠が足りないといふ事になるため、進退共に行きつまつてしまふて誠にみぢめな最後となるのであります。

進退兩難の末路

六 醫師への信頼と醫師の感激

醫師への絶対信頼

以上述べたところの凡ての迷信を捨て、絶対に醫師を信頼せよ、これが弱點の掃除策における第一の規條であります。この醫師を絶対に信頼するとい

ふところに自己の満足があり、同時にその醫師が眞面目な人であるならば、必ずや醫師としての感激味をもつ事はいふまでもない事であります。

稻垣博士曰く

私の法義上の友である元の臺灣總督府醫院長であつた稻垣長次郎博士が、この間かういふことを話されました。それは

「患者が最初診察に来たとき、ほんとうに自分を信じて病の全部を委せるといふ所謂絶対信頼の模様が見れるとその刹那にこんなことがあつても、この病氣を快くなくてやらねばならぬといふ感激が起つて来るものであります。かういふ場合には自分の責任が益々強くなる様に感じて、ほんとうに己を忘るゝほどの緊張味が起つて来るのであります。

この間も私の知人で絶対に私を信じてゐる患者の手當をしてゐると無論十二分の注意をして居つたけれども、申さば不可抗力的に、どうした間違か細菌が這入つて一時は非常な危険状態に陥つたのであります。此時

ばかりはどうしても死なしてはならぬといふ考へが強くなつて、殆ど徹夜して手當をしたが、その間に、なせに醫者になつたらうか、ほんとうに醫者はやめたいといふ心さへ起つたほど強い責任感にうたれたのであります。之が全くその患者が絶對に私を信じて呉れた感激から來たのであります。かくの如くなれば醫者と病人との間に互に精神相通じ、感激相和し、病床の人としての和やかな日暮が出来るのであらうと思ひます。

殊に一步進んで宗教的にながめて見れば、この醫師を信ずるといふことは、一面正しい理論としてもこれをいふことが出来るのである、つまり我々の信仰で言へば、我々を救ひ給ふ阿彌陀如來の御親は、智慧の光の上に、我々の迷へる原因と同時に悟り得ざる理由とを明かにして、而してその生死勤苦の根本、即ち迷ひの原因根本を抜きとつて悟の岸に引き上げ得る大能力大技術を成就し完成せられたところの御佛であると明かに信ずるが如く、同様に醫師

一松博士
云はく

は過去の學問やその他の實際的研究によつて確かに私の病を癒し得るのであると信ずるのであります。

之に就て現時東京の芝區田町に病院を開いてゐられる醫學博士一松美利君は九州帝國大學佛教青年會の幹事をしてゐられた人で非常に信仰の厚い人であるが、同君が「患者は只漠然と醫師を信賴するのみでなく、そこに醫師の治療的技能をも信ずることが必要である」と言はれたのである、之も矢張り前に申した宗教味の上から如來の大能力を信ずるといふのとははらぬのであります。

而して尙之を如來の慈悲の方面から味へば、慈悲とは抜苦與樂即ち苦しみを抜いて樂しみを與へるといふ事で三毒煩惱の病の苦を抜いて涅槃常住の樂を與へるのであるから佛様のことを大醫王と申してあり、又その佛様の中に藥師如來といふ様な名がつけられてゐるのもこの意味であるのであります。

諸岡博士云はく

前九州帝國大學醫學部の助教であつた諸岡存博士が之もこの間私にかういふことを話されたのである。それは、「あなた方が患者の道徳を御説きになるならば、佛の大慈悲は醫師の手を透して病人の上に現はれると信せよと教へて下さい」と申されたのであるが、之も醫者の仁術が拔苦與樂の慈悲であるからこの目前の慈悲を通して彼の佛の絶對の大慈悲を味ふといふ意味なのであります。

主治醫への尊敬の信頼

處がさうはいふても例へば地方に於てはその主治醫と所謂堂々たる病院の院長（それが博士の肩書でもある人）と比べると何だかみをとりがしたやうな心持がするところからして、所謂所武士旅坊主といふ式で、何となくかゝりつけの醫者よりも遠方の病院長がわらいやうにみわたるといふ事も人情としてほまぬがれられない點であるが、しかし私はかゝる場合に於てもかゝりつけの醫者即ち主治醫に對する信頼と尊敬とを拂いたいと思ふのであります。

主治醫への注文

而してその主治醫たる人も常に新しき病人に對する感で全生命を抛ち全責任を負うて、もし自分の専門外でもあれば、然るべき醫師を紹介し、又は直接依頼してもらいたいといふ注文をもつてゐるものであります。

七里恒順和上の話

是について私には斯様な有難い體驗をもつてゐるのであります。それは私の恩師で明治時代の徳と仰がれた博多萬行寺七里恒順和上の話であります。嘗て和上の弟子の一人でそれは養子として或る寺の住職となつて居た者が、その門徒が自分を尊敬する道知らぬといふ不足からしてその寺を出て行きたいといふ事を和上に申し上げた時、和上は

住職も尙主治醫の如し

「君は今自分の寺の門徒が自分を尊敬せぬから出て行かうと言はれるが、それはこれを例へていへば寺の住職と門徒とは、かゝりつけの醫者と病人といふが如きものであつて、何事も兩方からわかりすぎてゐる所から、親

しみのあまり何となく心安だてになるのである、そこへ外から病院長が立會にくるといふやうな時は、その病院長の方に特別の尊敬をばらふ様に、外から我々が君の寺にお客僧となつて行く門徒中が特別の尊敬をばらふのはあたりまへの事である。けれどもたま／＼に來た院長ではその病人の日頃の生活や體質や病氣の變化などはなかくわかりにくいものである、さうして又遂に病人が死ぬるといふ様な時には、外の院長等は最後までの附添も亦死んだ後の處置もしてはくれない、そこになれば何んと云つても受持の醫者でなければならぬ、快くならぬまでも夜晝親切に看病して最後の息まで看取つてくれるのは主治醫である。そこで病人の方でも、自分の最後までを取扱つてくれるのが主治醫であるといふ所から、親しき中にも無上の信頼と尊敬とを拂ふのがあたりまへである。故に君も受持の醫者の様な心持で、たとへ尊敬を受けても受けぬでも御門徒衆の心の病を

取扱つて、とにかくにお浄土までも地獄までも共に一緒にゆくといふ親切さをもつて御門徒衆を教化してゆくところに、僧侶としての本當の務があるのである」

とささされたのでありますが、斯様な心持になつてみればこの醫師を信頼し得た處に、殆どその病を超越したといはれる程の落着が出來て、何等の不安もなく靜かに療養生活にいそしむ事ができるのであると思ふのであります。

第三 自 覺 篇

一 病を恐れざること

これは大分難しい事のやうに思はれるのである、何んといつても自分の

健康と生命の敵である病を恐るゝことこそ當然であるのに、その病を恐るゝなといふのであるから成程相當に困難な事であるに違ないのであるが、併しながらその病を恐るゝといふ事のために却つて癒るべき病が癒らぬ様になりたり、又それほど悪くない病氣がこれがために俄かにその病勢を増したりする事はこれも亦有りがちの事であるのであります。それで病を恐れぬといふ事がやはり病人としての不安を一掃するに最も必要な事であるのであります。

病の佛教的考察

故に我々人間の上の病といふ事を今一ツ深く考察してみなければならぬのである、併しながらこの病氣なるものを醫學的に考へてみる事はそれは専門の人に譲つて、こゝには佛教の立場からこの病に罹るといふ事を考へてみたいと思ふのであります。

二人間の實相

生老病死

先づ第一に人間の實相といふものを考へてみなければならぬのである、人間の眞實相は即ち生老病死の四ツの過程であつて、人生すれば必ず老あり、さうして又病があり、さうして終には死んでゆくのである。これを離れて人間の一生は別にないのである。さうなるとつまり病氣に罹つたといふても、それはあながちに驚くにも當らないのであつて、所謂「雨の降る日は天氣が悪い」といふのと同様に、つまり我々人間の上に病氣があるといふ事が當りまへで、これが人生の旅行の一過程で次から次へと移り變り變り移つてゆく所の一ツの夢物語の一節にすぎないのであります。

雨の降る日は天氣が悪い
夢物語の一節

三 病に對する執着

かくの如く考てくれば今迄何故に病氣になつたであらうか、何故にこんな苦しい病にかゝつたのであらうかと徒に歎き苦しむ事、それは實につまらぬ事で佛教でいふ所の執着といふものであります。この執着を離れてゆく所に病氣に罹つたら仕方がない病氣は人間につきものだもの、罹つたからには又癒るものなら癒る時があらうと、徒らに癒らうとか癒るまいとか云ふ愚痴つばい考へから離れることが出来るのであります。さうなるとこの執着を離るゝといふ事が即ち病を恐れぬ所の有力な原因となるのであります。

四 人生は夢

人生觀の一種

さればその執着を離るゝといふ事は前に云た様にこの人世を生老病死の夢物語であり、夢であると感じることである、佛教では人世觀の一として、この人世凡てを夢の如しと観るのであつて、即ち人世は大夢の如しとか又は

一夢の如しとか或は如露亦如電、應作如是觀即ち露の如く亦電光の如し、故にまさには是の如きの觀をなすべしと教へてありまして、此の如くなれば、獨り病氣が夢であるばかりでなく、人世全體がやつぱり夢であつて、夢のやがて醒むる如く、此の人世は一種の繪巻物で次から次へと遷り變つてその最後には人世は死と共に夢と消へて、又次の世の夢に引き移るのであります。然れば既に人世の一切が夢であつて何一つも之を取り留むることが出来ないとするれば、實に眼前一抹の幻に過ぎずして、敢て執着すべき價值がないのであります。これが即ち佛教の一種の觀方でありまして、然もこれがやはり實際であります。名高い大閻豊臣秀吉が征韓の事業半ばにしてその命終らんとする最後に、あの一代の功業を顧て

豊臣秀吉の辭世

露の世に露と消ねにし我身かな

たい何事も夢の又夢

と詠んだのは實にこの人世は萬事夢といふ事を言ひ破つた歌であります。

大集經といふお經の中に次のやうな事がのつて居ります。

察微王といふ王様が都の中を微行して居られた、無論微行の事だから誰一人王様といふ事に氣付いたものはなかつた。ところがある大きな家の軒下に今で申せば靴みがきの様な者が居た、王様はその者の仕事をしみぐと見てゐられたが

「お前は何か面白い事はないのか、話してきかせよ」

「何を申しましても貧しい身の上でこれといふ面白い事はございませんが、たい終日働いて家に歸つて一杯のお酒を飲む事が何よりの樂みであります」

「其方はそんなに酒が好きか」

「はい、お酒は私は食物より好きであります。とてもこれを止める事はで

きません」

そこで王様は

「ウ、……成程おまへは酒がそんなに好きでもあらうが、何か外に、もう望む事はないか」

「さう申さるればないでもありません、出來ぬ事ではございますが只の一日でもよいから王様になつてみたいと思ひます」

と申した。これをおきゝになつた王様はお供の者に申しつけて酒を買ふて靴みがきの親爺に飲ませられた、さうして腹一杯酒をすゝめられたゝめに、所謂「下地はすきなり御意はよし、」たらふく飲んですつかり酔ふてそのまゝ寢てしまふた。それをみられた王様はにこゝと笑をふくみながらお供の者に申しつけて、その酔ふて寢てゐる靴みがきを王様の御殿に運ばせて體を拭きあげ、髪を結び、立派な王様の裝束をつけさせて置かれた。ところがその靴

みがきの親爺が目を覺すと、これはしたり奇麗だとも廣大だともなんともいへぬ王様の御殿で身には立派な装束をつけてゐるので、はて夢ではあるまいかと妙な考になり變な顔をして居ると、近従の者が靜かに手をついて

「王様にはおめざめでございますか、はて、なんともなくお顔の色が優れ給はぬのはどう遊ばした事でございますか」

「わしは大變苦しい夢、それは靴みがきになつて居た夢をみてゐた」

「それはなんともいへぬお氣毒な事でございます」

と近従の者どもはおかしさをしのんで合槌をうつた。ところが何さま王様の事だから所謂郡臣百官がつきまどうて次から次へと政治上の處置をしてゆかねばならぬ、そのいそがしい事といつたら何とも云ひようのないもので、さすがに疲れきつて當惑の色をしてゐるのを近従の者はみてとつて

「王様には大變お疲れの御様子であれば奥御殿にお引きとりあらせられてお

やすみ遊ばされる様に」

と申して、奥の御殿につれこんだ。さあ酒はある、肴はある、美人は居る、なんと云ふても王様の事、さてすゝめられるまゝに又腹一杯、酔がまはつてつひに前後不覺に寝入つてしまふた、その時ほんどうの察微王はにこ〜笑をふくみながらもこの通りにせよと仰せになつた。そこで王様の装束も皆はぎとつて元の靴みがきの姿にして再び以前の軒下に送りかへして置いた。しばらくたつてこの靴みがきの親爺がやつと目をさましてキヨロ〜と驚いた顔付をして居ると、その時王様は

「親爺おまへはよくねたなあ、そして何かしきりに寢言を言つてゐたが夢でもみたのか」

「はい、おかげで大層酔ひましてすつかりねいつて誠に面白い夢をみました、それは申し上げました通りに私は一寸でも王様になりたいと思つてゐ

ましたら、その願通りに夢でその王様になつたのであります」
そこで王様は

「おう、さうか、それは誠に面白い夢をみたのだなあ、どうだ王様といふものはよいものであつたか」

「いや／＼實に夢でこそよかつた、もう王様といふものにはコリ／＼いたしました、そのいそがしい事、窮屈な事、とてもお話にはなりません、私にはやはりこの靴みがきが相應しております」

と答へたといふ事である、これは王様の生活も乞食の生活も共に夢であつて、又共に執着しがいのないといふ事をお諭になつた事と思ふのであります。つまり靴みがきの親爺がとにかく實際の王様になつた時から考られば前の靴みがきは夢であつて、こんど再び靴みがきになつてみればやはり王様の位も夢である、さうしてその王様の位が却つて窮屈なものであり苦しいものであつた

王位も乞食も共に夢

といふ事から考へるとこれは執着のしがいのないといふ意味あひが含まれてゐるのであります。

夫婦の歌
よみ

次に挙げますのは日本の話であります、昔ある所に夫婦共に歌よみの名人があつた。ところがどういふ前世の因縁であつたか、終にその家が亡びてあさましい乞食となつてしまふて、所謂野の末山の奥、そこに一日こゝに一夜と夜を明し日を送つて居つたが、しかしながら好きの道とて相も變らず歌を詠んでは楽しんで居つた、ところがある夜京都五條の橋の下に寝て居ると夢の中に立派な公郷様がみわた

「その方等はその様ないやしい乞食の身の上におちても尙敷島の道に心がけ、これを樂しむといふ事は實に感心な事である、そこでこれから、その方を師匠として歌の道を教へてもらひたい。そのために迎へにきた……」
といはれた、そこで何ともいへぬ程に喜び喜んで乗物にうち乗り、その公郷様

のおやしきに行つて非常な楽しい榮華な身となつてよろこんで居ると、俄かに響く曉の鐘に、はつと驚き目をさませば、早や夜もあかねさす明方で相も變らず橋の下に檻樓をまごふて昔のまゝの身の上であつた、あゝさては夢であつたかこの夢の話を語りつゝ一首の歌を女房に示した。

ねるまのみ人に變らぬ思出を

浮世にかへすあかつきの鐘

その時これをみた女房はとりあへず

さめるとも何憾むまじあかつきの

かへすも同じ夢のうき世に

と返して

『あなたは夢の中に榮華の身となつてそれが夢であつたと歎れるが、さてさて愚かな事を申される事である、何れにしても人生は夢、夢の中の樂しみ

も夢なら、さめてくやむも亦夢、貧しきも夢富めるも亦夢、共に幻の世であれば佛の道に志す吾々にはさまでくやむ事はあるまい』
と申したといふ事でありませう。
斯の如く人生の凡てを夢と感ずる時、たしかに執着を離るゝ事ができて來るのである。さうなれば病も亦この夢の中の夢であるといふほんごうのアキラメによつてこの病に對するいろ／＼な恐怖が充分に薄められ、軽減されてくるのであります。

五 運命への安住

運命觀の安住は執着を離る
而して又運命といふ事が常に言はれてゐるが、これも正しい運命觀に安住する事になると亦一ツの執着を離るゝ所以の道となりませう。人世を直觀して直ちに夢也といふ大達觀に入る事が執着を離るゝ道であると共に、又こ

れを一面から運命なりとみる事もやはり執着を離るゝ一ツの道であります。佛敎ではこの運命といふ事を因縁とか業とか果報とか申して居ります。かうなればこの運命によつてわた所の病である以上どうする事もできないといふやうな諦が起つてくるのである。己に運命といふ事は人力を以てこれを左右し動す事ができないものであるから、かうなれば、考へたり、悶わたり、苦んだりする事が結極無用な事であるといふ落着が起つてくるのであります。自然の運命は、一面人力を以て到底如何ともする事が出来ぬと云事であるとするならば、この運命とは宇宙間にあるところの一種の最大權威を具へたる命令とでも云べきもので、つまりこの命令に對しては一切萬物何物と雖も盡く絶対に服従しなければならぬといふ約束であるのである、例へば春夏秋冬の四季の變化の如きものもやはり天地自然の運命といふ事ができる、花咲く春が自然の中に青葉飾れる夏となり、又やがて一葉落ちて天下の秋を開

き、たちまち皚々たる一望の雪に包れる冬となつてゆく、この季節については、如何なる権力も亦金力も亦知力も何等の價値もなく、やはり絶対に服従してゆくより外にはないのであります。

斯の如く季節の變化が何人と雖もこれを否む事が出来ぬやうに我等人間としては生老病死の四ツが嚴としたる我々の約束であつて、生れたる限り自然に老いゆかねばならず、その中にはどうしても病が起つてくる、最後には死なねばならぬといふ事は、即ち我等のうけたところの自然の命令で定つた業であり、果報であり所謂因縁であるのであります。

大聖 釋尊の十大弟子の一人であつた阿難尊者といふお方は非常に奇麗な所謂容姿端正なお方であつた、ある時一人の御弟子が大聖 釋尊に「阿難尊者は何故にあんな奇麗なお方でありませうか」とお尋ね申し上げた時、釋尊は「彼阿難は前世に於いて忍辱の戒業（忍辱の修業とは如何なる場合にも腹

最高最尊
の権力者

をたてぬ事で即ち怒の顔色をあらはさぬ事であるを修めたるためにその果報として、あの容姿端正なものとなつたのである」とお示しなされたのである。これが即ち運命と申してよいもので、ちやんと前世から約束づけられた業であつて、これが天地間の最高最尊の権力者であり命令者であるのであります。

かういふ風に、自分の上にならぬところの病氣がとにかく運命であり、前生から約束づけられて居るところの因縁であり業であるといふ考が起つてくれば、こゝに明かに今迄の如き悶々や呪や苦しみから逃れて、そこに執着を捨つる事が出来て、今迄の如く病を恐るゝといふ事が極めて少くなるのであります。

六 正しき運命観

然るにこゝに特に注意せねばならぬのは、只何事も運命であり因縁であり宿業であると打ち棄てゝ、病に對する注意やその他療養上の努力をすつかり投げすてゝしまふてもよいかといふ事で、それは決して許されない事であります。といふのはこの運命因縁といふ事が果してどうなつてゐるか明かにわからぬのが我々人間であるが故に、こゝに於いてかの蓮如上人の

時節到来

『時節到来といふは用心しての上の事なり』

といふ御言葉がよく味れてくるのであります。何事の上にも人間としての用心のできるだけ用心して、さうしてそこに起つてきたところの災難や病氣ならばこれがほんどうの時節到来で所謂運命であり因縁であり業であり果報であるといふ事になるのであります。これを孔子は『人事を盡して天命を待つ』と申されたのであらうと思ふのであります。

天命を待つ

誓了院の
運命観

誓了院は私の父放麟のことでありまして、今から二十七年前に亡くなつた

のであります。誓了院は其の一生を傳道に送つたために北國から名古屋、和歌山其の他九州全部に亘つて到る處に法義上の知己がありました。故にその病に罹るや四方から信徒がひつきりなしに見舞に來たのであります。

或る時、一人の信者が

『あなたは五十七歳におなりなさることであるが決して老いたといふ歳では御座いませぬ。之からが實に尊い晩年の傳道の上に花が咲き實がなる大切な時であります。それなのにこんな重い病氣におなりなされたといふことがまことに残念であります。世の中にはあまり働きのないのに體も丈夫で、又幸せもよい人があります。それにあなたの様な實際御法義のためにお働きになつてある人で傳道のためには是非丈夫であつて頂かねばならぬ御方がこんな病氣に罹られるとは何故でせうか……かうなるは何んだ

か佛様の御利益がない様ではありませんか、そこでどうやら佛様に不足が言ひたい様な心持もいたします。』

と申した時

『之は何を言はれる。私は兼て人にさへ教へる身ですもの、我身の健康といふことには十二分に注意もし、この病に罹つてからも一意専心主治醫の命令を遵奉し、その主治醫からの勧めで専門の醫者とも立會つて頂き、薬用手當には更に手落なく盡くして貰ひ、自分も今一度全快して御法義のために盡くさせて頂きたいと念願してゐるのであるけれども、この通りになつたのは因縁であり運命であると安らかに落着いてゐるのであります。』

さうして又靜かに考へてみれば佛様の御加護があり御利益があつたればこそ抑々體質的に餘り強くない私が、この年迄も長らへさせて頂いたので若し佛の御加護がなかつたならば遠くの昔に死んで居つたに違ひな

い。されば不足どころか運命をはかなむどころか今日迄生きながらへさせ
て頂いたことがまことに不思議で有難いとも勿體ないとも言ひ様がないの
であります。殊に今や、み光のうちに包まれ、攝取の兩手に抱き上げられ
て往生淨土の道を一步一步進ませて頂き、やがて來るべき佛果の悟を思
へば、たい私をこの儘救ふて下さるところの如來の大恩に感泣するより外
に、何物も御座いません』

と答へたのであります。

左右に侍して看護して居りました當時を偲びますと父誓了院が念佛の信仰
の上から實に悠揚迫らざる運命觀に安住して居つた模様があり／＼と見ゆる
様であります。

かうなればそこに決して自暴自棄的な、どうでもよいといふ様なうつちや
つた考は全くなくなつて、どこまでも奮闘努力をつゞける勇氣が起つてくる

運命の開拓云ふ
こと

のであります。世の中には運命の開拓といふやうな言葉を使つてゐる人もあ
るがこの運命の開拓といふ事はあまり適當した言ひ方ではないとしても、結
極ほんたうの約束された運命といふ所までに届くべく奮闘努力する事を運命
の開拓といふならば、そこまで届かぬうちに自分で自分を破壊して仕舞ふの
は運命を開拓しないのであります。

例へば冬が寒い夏が暑いといふ事は、これは所謂自然の運命であつて、こ
れだけは如何ともする事はできないから、どうしてもこれに服従してゆかね
ばならぬのであります。しかしながらその冬の寒い中に毛物を着るとか
火を焚くとかと、いふ事はやはり必要な事であり、又夏は扇で涼しい風をよ
び起したり、氷を巧みに用ふるといふやうな事によつてこれを凌ぐ事がで
きるやうに、我々が病をうけるといふ事、同時に又そのうけたる病によつて
死なねばならぬといふ事も、その療養上の注意や努力によつて或は病を征

伏し之に打勝つて元の健康體に歸るか、又は全快せぬといふにしてもその病の苦しみを軽減し得るといふ事は間違ない事であります。又一方からはこの注意と努力によつてその病を正しく視る事即ちその病の上に恐るゝ事や疑ふ事や世に所謂取越苦勞をする事がいらぬ事になるのであるから、こゝに初めて今迄の如く病を恐るゝといふ事から逃れる事ができるのであります。

取越苦勞

七 執着を離るゝところに益々醫師を信頼す

今迄申したところの病を恐るゝといふ事が我々人間の大きいなる弱點で、こゝからして何故にはかくしく癒らぬであらうか、薬がきかぬであらうか、といふ様になり、内には憂に憂を重ね、恐に恐を積み、自らを苦しめてゆくと共に、外には醫師を信頼するといふ心が缺けてくるのである。かうなれば癒るべき病も終に癒らず、又苦しみますにゆく事のできるどころを、自ら求めて苦しんでゆくやうになるのであります。倉田百三といふ人が自分の病の癒つ

たのはその病を忘れたからであると申して居るがこれを今迄述べた言葉で云ふならば、忘れるといふ事はつまりその病に對する執着を棄て、邪念を拂ふ事であらうと思はれるのであるが、私をして言はしむるならば、これはつまり病を病のまゝに見る事で、病に對するいろ／＼な恐や疑やその他の種々な雜念を離れて、只從順に自己の信する醫師の命令の通りに精進し努力するのである。かくすればたとひその病のために斃れたとしても、そこには何等の遺憾がないのであります。

醫師を信じたる柔順な青年

嘗て私が福岡醫科大學の佛教青年會に話をして居た時の事であるが、武谷内科に中學校を卒業してまもない青年が入院して居た。この青年は極めて性質の悪い肺病であつたが、それがために宗教を求めた結果、私にも因縁が出来て時々御慈悲の道の話をして居た。又今迄申した様な病についての注意をも語つた。彼は快くこれを了解した。それからといふものは醫師のいふがま

に服従して、許されるまでは決して體を動かさず、又更に一口もものをす
 ら言はなかつた。そこで私はある時どうしてあなたはそんなに體も動かさず
 ももの言はぬやうに、ほんたうによく先生の命令を守るやうになつたかと尋
 ねてみた。彼は後で主治醫の許可をわてこれを紙に書いて私に答へた。それ
 は、次の如き答であつた。「私は先生のお話をきいてから今までの私の考が
 間違つてゐる事に氣付きました。それで私はお醫者様の仰せの通りを守りま
 して、これだけの時間は動いてならぬ、又はものを言つてはならぬと言はる
 ればその命令を守つてゐますから、先生にもこの通りにお醫者様のお許を
 紙に書いお答をいたすわけであります。それは私がお醫者様の命令にい
 さゝかでも叛いて、そのために死ぬといふやうになつたら必ず私は後悔をし
 たり、愚痴がこぼれたりするに違ないと思ひます。けれどもこれからその命令
 を一分一厘でも違はぬやうに實行してゆきさへすれば、たとひこの病が治ら

佛教的療
 養道

ずに死にましても、それは私のほんたうの運命であり因縁であり業であること
 諦め得る事ができるのでありまして更に何等の遺憾もないと思ひます。これ
 が佛教を信じさせて頂きました私の幸福であり、又進むべき道であると思ひ
 ます」といふのであります。そしてさしもの病氣もすつかり快復したので
 あります。
 斯の如く病を恐れぬ事と、醫師を信じてゆく事とが正に佛教を信じたるも
 の、誇であつて、これが病に處してゆく佛教的療養道であると思ふのであり
 ます。

八 病を恐るゝ所の根本原因

今迄申し述べた事によつて病人の弱點即ち醫師を信せぬ事、病を恐るゝ
 事の二つを一掃する事が病に處してゆく道の最も大切である事がわかりに
 なつたであらうと思ひます。

病を恐る
根本

無明煩惱

佛道修行

一部分の
悟

然るにその病を恐るゝといふところの根本を今一步進んで考へてみると、その根底は結極その病氣が癒るか癒らぬか、解らぬかといふ事に歸するのである。即ち解らぬといふ事がその病を恐るゝ根本の原因である、この解らぬといふ事を佛教では無明といふのであつて、これが我々の煩惱の根本であるのであります。我々には澤山の煩惱があるのであるが、煩惱といふ事はよんで字の如くわづらひなやむといふ事であつて、即ちあらゆる事に煩悶し惱亂する事でありませう。我々の煩悶惱亂の根本であるこの無明を取り除かねば到底このわづらひなやみから離れる事はできぬのである。故にこの無明を明ならしむる方法が即ち佛道修行であるのであります。この佛道を精進し努力して得たるどころの結果が即ち悟であり、この悟を得たる人を佛といふのであります。ところがこの事實上の悟をひらいて佛になるといふ事はなかくむづかしいのであるから、先づ以てその一部分の悟とでも云ふ可き思念上の

病を恐る
は死を
恐るゝな
り

死の苦痛
不安

光を得てみたいものであります。これが即ち前に述べた所の因果觀であり運命觀であるのであります。而して尙その病を恐るゝといふ根底には、死を恐るゝといふ事が横つてゐるのであります。即ち大抵の苦しい病氣でも、この病氣は決して死なぬといふ事がきまつて居るならば同じ苦んでもその苦みやうが餘程軽いのであります。けれどもよくならぬ時は死ぬるといふ結論を持つてゐるから、そこでこの病氣が非常に恐れられるものであり、又おそろしい感じがこの上もなく強いのであります。然ればその死がおそろしいものであるといふ事は、つまり苦痛と不安とがあるからの事である。死の苦痛といはるゝものには先づ第一に死が苦痛であるものと想像する事、即ち佛教で死苦といはるゝものと、それから第二には愛別離苦である、即ち死ぬるといふ事「凡ての愛する人や、又、物と」別れて行かねばならぬ事を思つた時にそれが非常に苦痛であるといふ事、それが

第三には死後の未來即ち死んで行先の事が眞闇である事等が大なる不安を伴ひ、そこに又苦痛があるのです。これが即ち病を恐れ進んで死を恐るゝ所の原因であらうと思ふのであります。

九 死 苦

五識明了
臨終の愛
執

第一、病理的の死を恐るゝといふ事も佛教でいふ所の死苦といふものも、實はお互に何等の體驗をもたぬもので、結極人の死にゆく相などを見て我が身に思ひ比べて死はきつと苦しいものであらうといふ想像に外ならぬものであるけれ共、たしかにそれはやはり苦痛である。尤も佛教の説く所によれば、この死んでゆく順序の上に、最初の方は五識明了位と申して五識即ち眼耳鼻舌身所謂五官がまだはつきりしてゐる時、いよく死ぬるとなると、境界愛、自體愛、眷屬愛といふ様な非常に強い愛執が起つてくるのである。即ちこの

意識獨存
位
斷末摩

長い間もち續けてきた所の體を今は棄てゝ行かねばならぬかと思へばそこに無限の執着が起り、又今迄長らく住んでゐたこの家屋、財産、地位、名譽を棄てゝゆかねばならぬかと思へばそこにも亦無限の愛執が起る、さうして又長らく愛してゐた妻子眷族に別れねばならぬかと思ふとそこにも亦無限の愛執が起つてくる。而してかういふ苦痛の許にその目も耳も口も鼻も次第に感覺を失ふてきた時、最後に意識獨存位におちて所謂斷末摩の苦みをうくることいふ事である。末摩は支節と譯する、つまり斷末摩といふ事は體の骨節が一時にばらりと切れ離れる事で實に苦しいものであらうと思はれる。かうして終に死の終をつけて魂が未來へとゆくのである。斯くなれば實にその死の苦痛は言語に絶したものであらうと思はるゝのであります。

十 愛 別 離 苦

而して第二に愛別離苦といふ事は、普通に子供を死なし、妻をなくし、夫を

愛別離苦
臨終の
愛執

愛別の苦
とは何ぞ
や

なくす時をいふのであるけれども、自分が死んでゆく時に凡ての愛するもの
即ち妻子財産に別れて一人出てゆく事もやはり愛別離苦でありまして前の臨
終の愛執はこの愛別離苦の苦しみとしてみる事ができるのであります。愛す
るものと別れてゆかねばならぬといふところの苦痛は、何故に愛するものと
別れねばならぬだらうか、この世界には是非とも別れねばならぬといふ義理
がどうしてあるのであらうか。常に何時までも一緒に居たいといふ願をもつ
て居りながら、何時までも一緒に居る事が許されて居ない、即ちどうしても
別れねばならぬ事の非常な苦しみである事を云ふのであります。

故にこの苦しみから逃れやうとするならば、つまりこの苦しみのない世界
そしてそこは一度會ふて決して再び別るゝ事のない世界、その世界に生るゝ
事より外にはないのであります。

今假に自分が死んで愛する者と別るゝ苦しみや悲しみを想像してみる前

に、今一度自分の愛した子供が死んでそれと別れた自分の苦しみ、即ちこの
實際に経験したる愛別離苦を思ふてみななければなりません。

千代の句

破る子のなくて障子の寒さかな

何んど悲しい句であります。なんと淋しい歌であります、實際いた
けな子供がその桃の花のやうなあいらしい頬に、にこ〜と笑をみせながら、
這ひまはりのび上り手のとく限り障子といふ障子をおもしろさうに破つて
ゐたのに、今その破り手のない障子を張りかへてみれば、去年の冬までは子
供が破つた破り目から寒い風が吹きこんでは「又徒がはじまつた、おう寒いな
あ」といつてゐたのに今張りかへた障子の中で、吹き込む風はないけれ共破
つてくれる子供の居ない淋しさが、尙一入身に泌みてなんとさみしい寒い冬
であらうか、却つて破れ障子がこひしゆうてならぬと詠ふた千代女の句は如
何にもよく我々人間の愛別離苦を云ひあらはして居るのであります。

一緒に居
るこのの
出来る國

斯様に死んだ子供が可愛くて、さうしてその死んだ子を追ひ、死んだ子を思ふならば、その子の行先を尋ねねばならぬのである、死んでどうなつたか、どこに行つたのかを追求しなければならぬのである。さうしてほんとうに可愛い、のならば、彼を救ひ彼と一緒に住む事の出来る國を尋ねなければならぬのであります。

習慣上の
儀禮

然るに、たい可愛い、といふてもその死んだ子供は火の消れたやうなものであつて、その子供の行く先は全くわからぬと云ふ事であるならば、何時までも泣きかなしみ、その子を思ひ慕ひ憐れむ必要はないのである。それに尚所謂心やり思やりをするといふところから誦經香花供養等をするといふ事は、ほんとうにその子が可愛い、といふのではなくて思ひきつて強く言へば全く習慣の上から流れてきた所の不眞面目な道楽とでもいふてよいのではあるまいか。

低級なる
宗教思想

世の中には死んだ子供を思ひ出す度に可愛い、さうでならぬといふては、生前彼が好きであつた所の食べ物や花や書物や玩具やその他のものを佛前に供へてみたり、又は彼が好きであつたからと言ふては、音樂會を開いたり、淨瑠璃會やお能のもよほしをしたりなどして彼を慰め得たかの如く思ひ、それが又死んだ子供に通じて居るかの様に思つてゐる人たちも少くないのであるが、考へてみれば死んだ子供が何時までも自分の側について居たり、淨瑠璃を聞いてはよろこび、能をみてはたのしみ、花をみてはよろこび、お供のお菓子を食べてはうれしがるといふやうな事があるものではないのであります。若又死んだ子供を自分の心の中で思ひ出す度毎に死んだ子供と會はれると思つたり、又甚しきに至つては時々その子供をみる事ができるなどといふ事はむしろ迷信であつて、もし之も宗教であるといふならば極めて低級な一ツの宗教思想であるのである。故に斯様な事をやつてゐるのは決して死ん

自己満足

だ者のためにといふ事よりも、さういふ詞やさういふ思によつて只勝手に自己満足をして、そして自分のうけた悲しい苦痛を慰めてゆかう、苦しみを軽くしようといふ實に横着至極な誤れる考といはねばならぬのであります。つまり、もそつと強めて言へば自分の頼にしようと思ふ子供が亡くなり、自分と共に楽しんで行かうとおもふ妻や夫がなくなつて、結極自己の望や自己の力をそぎとられたといふ自己の不利益から、又頼にしてゐた者が死んで頼を失つて力をおとすところから悲しむのであります。故にどこまでも自己を中心とした功利的な考から割り出された悲しみであり苦しみであつて、決してほんとうに愛するものゝために苦しむ、愛するものゝために悲しむといふ事ではないのであります。

親鸞聖人
ミ法然上人

親鸞聖人は亡くなられた御両親の後を追ふて、是非に會ひたいとの望から道に志され、法然上人も亡き親のために出家をせられたのであります。が、これ

目蓮尊者

がほんたうに親を愛し親を救はんがためであり、又その親といこゝまでも一緒に居たいといふ眞實の願のためであります。眞に愛するものが死んでごうなつて居るかいはわからぬとするならば、それをほんたうに案じ、追求め、みきはめる事がほんたうにそのものを愛する所以であるのであります。故に大聖釋尊の十大弟子の一人で神通第一と言はれた目蓮尊者が、その悟を開くやいなや先づ第一にその母をお尋ねになつたといふ事や又大聖釋迦如來が道を成せられるやいなや直ちに兜率天に上つてその母を教化せられたといふ事等は、ほんたうの愛の徹底であり、又孝道といふ道德もそこに明かになつてくるのであります。

愛の徹底
ミ孝道

そこでさうなることやはり淨土眞宗でいふ所の、信心をうるといふ事はつまり願作佛心といふ事でありませう。願作佛心といふことは自分が佛になるといふ事であつてそのまゝが度衆生心、即ち他の苦しみをまぬがれしめ之を救は

願作佛心
度衆生心

ねばならぬといふ念願となるのであります。

故に先づ我身が救はれて佛になつたところに他の苦しみを救ひ上げて佛になすといふ力ができるので、かうなると我が愛するところの凡てのものを助け救ふて何時までも、諸共に楽しむ事ができるのであります。

かくしてこの死の苦しみや愛別離苦の苦しみが大いに軽減されてゆく事になるのであります。

十一 未來の闇黒——地獄——極樂——如來

次に未來の闇黒に對する恐であるが、これについては嘗てあなたが質問をされた事もあつたので極めて簡單であるけれども少しく申し述べてみたいと思ふのであります。この未來の闇黒といふ事は、言ふまでもなく死んで出て行く後の世が眞暗がりわからぬといふのであるから、ごくつきつめて申せば魂即ち心は消ゆるものであらうか、又は消ねぬものであらうか、地獄と

靈魂の問

佛の存在の疑問

いふものが果してあるであらうかどうか、従つて佛さまは居られるだらうかどうかといふ點がはつきりしない事で、つまり未來が眞くらであるために落着がないのである。故に先づかういふ事を明かにしておく事が最も必要であると思ふのであります。

宗教智識の欠乏と俗論の障害

然るにそも／＼かういふ様な事の上に不審が起つてくるといふ事は、一ツには宗教の知識が足らぬといふこと、二ツには世に所謂俗論即ち無責任な議論が割合に有力な邪魔物となつてゐるためであります。例へば魂がありそれが消えずに未來へ行くといふ事がほんたうであるならば、その魂といふものも未來といふものも見えさうなものであり、又その未來から通信即ち手紙でも來さうなものであるとか、又所謂地獄は誰がつくつたものであるか等といふ様な極めてつまらぬ愚かな議論が割合に邪魔物となつて居る場合が少くないためであります。これが全く佛敎に説かれてある所の敎訓に接する

機會の少いところから起つて来たのであります。

これについて思ひ出されるのは名高い無盡居士の話であります。無盡居士といふ人は支那の宋時代の人で張天覺と言つてゐました。この張天覺は日本でいへば菅原道真公のやうな大學者で孔子の教を學んだ人でありました。ある時寺に行つて一切經を見ましたが、何といふても七千餘卷といふ大部のものであるから、儒教の少い書物がなんとなく肩身の狭いやうな氣持がし、嫌な感じがし、残念だなあと思ふ心も起つて家に歸つてもどうしても寝られない。しきりに考へ込んでゐる時、妻君が「あなたは何をそんなに考へて居られますか」と問ふた。張天覺は「おれは佛教が嫌いだから無佛論を書かうと思つて考へてゐるのである」と答へると、妻君はよほど惻巧な人であつたとみわて、「あなたは已に無佛即ち佛がないといふのならば最早それを議論する必要はありますまい」といふたので、これにはさすがの張天覺も一寸鋒先

を挫かれて無佛論を書く事を止めた。然るにその後友達の所でふと机の上をみると維摩經が乗つてゐる。はつと思ふてどんな事を書いてあるかと手に取つて一二枚讀んでみると如何にも面白くて讀みかけて歸る氣になれないので、終にそのお經を借りて持ちかへり、眞劍になつて熟讀して居ると、それを見た妻君が「あなたは何をそんなに眞劍に讀んでゐられますか」と尋ねたので張天覺は「これは維摩經といふお經で維摩居士といふものが佛法を説いたもので、大變面白いものである」と答へた時に妻君が「そんならさういふお經をよくお讀みになつた後に無佛論をお書きなされたらよろしうございませう」と言うた。さすがの張天覺も豁然として悟つて、それから眞劍に佛教を研究し、遂に非常な佛教の信者となり、後には反對に護法論三卷を書いたといふことであります。

斯様に所謂食はず嫌ひといふことが誠に悪いことであつて、佛教の靈魂論

とか地獄論とかはどういふものであるかを知る事が最も必要であるから、そこで極めて簡單ではあるが、一應これを述べることに致します。

所が所謂魂の消ぬ事、未來のなければならぬ事、地獄のあるといふやうなもの一つの道理を説けばすべてがわかるのでありまして、例へばハンカチの一隅を上ぐれば他の三隅は自然に従ふが如きものであります。

一隅を上ぐれば三隅従ふ
因果の法則

抑一切の事物は悉く因果相續といふことを原則としてゐるのであつて、即ち因あれば必ず果あり、結果があつて原因のないといふ事はないのであります。凡てのものが、生じたり滅したり、いろ／＼に變化するのが、それが即ち原因結果の相であります。例へばこれを學問の上で申せば、一つのものゝ上に、これは何處から出て來たのか、どうして出來たのかといふ風に尋ねてくると、そこにそのものゝ原因、即ち本を究尋めねばならぬのである。か

ういふ様に汽車の走るのは何故か、病が起るのは何故か、鳥は飛ぶが人が飛べぬのは何故か、雨が降るのはどういふわけか、海水の鹽はゆいのは何故かと、その原因を尋ねて行く所に學問の發達があるのであつて、一切のものは原因より結果を生じ、その結果の中に次の原因を結び、さうして又次の結果となつてゆくやうに、この因果は相續連關してどこまでもつきぬのであります。結果より原因に遡つて之を尋ね、又原因より下つてその結果を尋ねて行くこと、結極その始もなく、又その終もなく、所謂無始無終となるのである。無始無終なるが故に不滅である。これを因果不易の道理といふのであります。

物質不滅
勢力恒存

而して現代の科學では物質は不滅なり、勢力は恒存なりと言つてゐる。即ち宇宙間の凡ての物質は決して消れるものでない、有るものである、増すものでも減るものでもなく、即ち不増不減のものである。而してその物質が種

固體、液體、氣體

六四
々に變化して行く所に一つの勢力があつて、この勢力は恒存即ち恒にあるもので、又決して消えないものである。例へば固體が液體になつたり、液體が氣體になつたり、その氣體が又液體に後戻つたり、固體に變化したりする、その動く所のもの、それを動かすものそれが即ち勢力であるのであります。丁度茶碗一杯の水が火の上で段々水蒸氣となつて空中に上つて行けば、茶碗の中は全く一滴の水もなくなつてしまふ、これは水が消れてなくなつたのであるけれども、決して斷滅したのではない。即ち相と形とを變へて、目に見えない水蒸氣となつてしまふたのであります。所が又それがはるかの大空で寒冷にあふと綿の様な雲となり、それが段々集つて、遂に雨となつて降つて来る。も一つ寒冷にあへば、雪となり霰となり、或は又固つて氷となるのである。故にその水の本質即ち物質は何等更に變りがないといふのであります。又固い固い薪でもこれを燃やしてしまへば、大部分は炭素や窒

素となつて空中へ飛散してしまひ、僅かに残つた灰でもこれを水の中に入れば殆ど溶解してしまふものである、かうなるとこの形のあつたしつかりした所謂固形物は一變して全く無形のものとなつてしまふのであります。けれどもこの大部分である所の氣體は又再び多く植物から吸収され又元の固體たる材木となり、又或は薪となるのであります、雨とか霰とか氷とか雪とか水とか薪とかといへば目に見るけれども、水蒸氣や炭酸瓦斯となつて段々高い所へ上れば無論形もなく、従つて目に見る事は出来ないものとなるのであります。こゝに物質は不滅であり、勢力は恒存といふ道理が言はれるのであります。

肉體は物質
精神は勢力

我等の肉體は物質であり、我等の精神は勢力であります。この單純な道理から言ふても體が死ぬるといふ事は、丁度水が水蒸氣と變化したといふ様なわけであり、その體の變化し行く裏には即ちそれを變化せしむる所の勢力所

有形無形

機械的運動

謂魂、心があるのであつて、かうなつてくれば心の消ゆるなどといふことは極めて愚かな考へであると言はねばならないのである。心は目に見えない即ち形がないから、無いものではあるまいかといふが如き愚かな議論をする者があるが、それは空氣や亦その空氣中の酸素や窒素や炭素といふものは形がない爲に目には見えないけれども、しかし在る事は間違ひないので全く同じ事でありませう。而して又形があると言つてゐるものも一つの變化をすれば全く形のないものとなつてしまふのであるから結局有形といふも無形といふも同じ事になつてしまふのであります。

かくの如く物質不滅勢力恒存といふ原則からして肉體の本質も亦心も共に不滅であるといふ論理を立てると、よく次の如き愚論が起つて來る事がある。唯物的な科學者の中には、物質に依つて人間の體や、若しくは他の生物が組立てられた時に機械的に運動が起る、これが心であつて、肉體と精神との二

自然とは何ぞや

智情意

つが別にあるのではない。それは丁度時計が機械的に組立てられて動く如く、又機關車がひとりで走るが如きものであるといふのであるが、もし斯の如くとしたならば汽車に機關士が居なくても、又時計のチヂをかける者がなくとも機關車はひとり走り、時計はひとり動くといはねばならぬ事になるのであるが、その様に人間の諸機關が具備されてもそれを動き出さしむるもの、即ち汽車での機關士の如き、時計のチヂをかける人の様な働をするものは誰かといへばそれは即ちその具備された肉體の諸機關の機械的の活動であるといふのである。然らばその自然とは何物かと問へば、こゝでゆきつまつてしまふのである。そこでこの人間の體の機關士であり、チヂをかけるもの即ちその自然といふものが魂即ち心であらねばならぬと思ふのであります。

而してこの心を普通、知情意の三つに分けて考へる時にこの知情意が既に

又共に無限であり不滅であります。即ち我々の知識が何程知り得たとしても、最早これ以上知る事は出来ぬといふ限りもなく、情即ちよろこび、うれひ、たのしみといふ事もこれ以上のたのしみ悲みはないといふ限りもなく、又意志の力にしてもこの體の力では無論百貫二百貫といふ重いものは動かすことは出来ないけれども、意志は依然として無限であるから自分の體力が及ばねばこの意志の力は知識と連關して種々な機械の上で千貫でも萬貫でも動かし得るのである、起重機の如きはその確かな證據であります。

進化と退

かくの如くこの心即ち知情意が無限であるが故に、その進化も無限であると同時に又退化も無限であるのであります。今こゝに退化を善とするならば退化は悪といふことが出来る。知識が科學的に何程進歩してもその情が濁つて來れば所謂この知識の進歩は却つて悪の方へ退化してくるので

科學者の
残忍性

ある。こゝからが宗教の見方でありまして、例へば世界大戰後に於ける兵器について考へてみても所謂科學者の残忍性に富んで居る事が驚かされるばかりにあらはれてゐるのであつて、兎に角次の様なことが言はれて居るのであります。「かの世界戦争當時の科學者は小賣的殺人法しか知らなかつたのであるが、大戰後の科學者は次回の戦争には卸賣的殺人をなさねばならぬ」と故に歐羅巴でも亞米利加でも日夜この研究に没頭してゐる學者が少くないこの事で、既に毒瓦斯の如きも大戰當時の獨逸の用ひた毒瓦斯の五十倍の力あるものを發明して、空中より投げ下した一つの爆彈で獨逸の伯林全市の人を皆殺しにしようといふ事である。その他毒液毒菌毒光線といふが如き研究はそれ〴〵秘密に研究が重ねられて所謂一時に數千萬人を殺さうとする事が考へられて、それも既に或は成功されてゐるのではなからうかと考へられる。かうなると科學の知識の進歩は即ちその學者の恐るべ

七〇
き残忍性の爲に全く退化して、猛獸毒蛇も及ぶ事の出来ない殘虐なものとなつてしまふのであります。

流轉輪廻

前に申した如く水が蒸氣となり又雨となり又水に戻るが如く一切の物質が固體氣體液體と轉々變化して行く所の相が即ち佛教でいふ所の流轉輪廻であります。輪のまはるが如く、繰りかへしくりかへし變化相續してゆくのであるが、この物質がかくの如く變化輪廻する様に我々の心も同じく無限に變化輪廻して行くのであります。即ち我々の心が善に變化し進化する時は人間以上のものごもなり得べく、同時に惡に變化退化する時は、牛馬魚鳥となる事もある可く、又牛馬雞犬も進化しては人となる時もある事は間違ひない事であります。

淨業ニ染業

佛教ではこの進化の心の原因を淨業と名付けて退化の心の原因を染業と名付けるのである。淨とは善であり、染とは惡であります。この淨業の最上位に

淨土ニ地獄

ある人を佛と名付け、その佛の居らるゝ世界を淨土といふのであつて、染業即ち惡の最下位を罪人といひ、この罪人の居る所を地獄といふのであります。而して佛教では、この善と惡とを迷と悟とに分ち、その迷の中にも亦善と惡とを分けるのであります。これは餘り専門上の事になるから省いておきます。而してこの迷と悟、善と惡とを十段に分ちてこれを六凡四聖と名付けてあります。佛、菩薩、聲聞、緣覺（以上四聖）天上、人間、修羅、畜生、餓飢、地獄、（以上六凡）これを十界といふのであります。故に唯人間界の上に於て善と惡とを分けて、そこに佛や地獄を作るが如きあさはかな考へではいけないのであります。

六凡ニ四聖

冷かな論理ニ暖かき實際

七二
今まで述べました所はありふれた世の中の俗論俗難に對して、簡單乍らいくらかの論理的説明を加へまして極めて冷やかな話となつてしまひ、却つてわかりにくかつたのではなからうかと懸念するのであります。しかし

乍ら前に申しました如く先づ所謂世の中の愚論といふものを一應説明しておかなければ折角の實際論が生きて来ない恐があるので、やむを得ず冷やかな論理上のお話をしたのであるからお許を願ふとして、これから今少しあたゝかくひつたりと實際について語つて見たいと思ふのであります。

それは現にあなたの病氣について直に批判してみたいのであります。すが、思へばその品格に於て將又性行の上に更に申し分のないあなたが、まだ老年でもない 働盛りの時にそんな病氣にかゝられたといふ事は 第三者の私から考へてもどうした譯かが分らないのみならず、又活動と責任との二つの上からあなたのお身の上にも何とも言へぬ同情が湧き上つてくるのであります。いはんやあなた自身としてはとてもやりきれない、包みきれない煩悶や苦痛があられる事も深く察してゐるのであります。冷かな病の床にあなた自身があなた自身を考へられる時に、あなたの日頃の

體質の問題

宗教的知識は必ずあなたをして、そこに魂とか未來とかすゝんで佛さまといふ事を、はつきりと思はしめ味はしむる事であらうと思ふのであります。故にどうしたわけで斯様な病氣が出て来たのであらうかといふその原因をたづねてくる時に、それをだん／＼つきつめて居ると最後にはその人の體質が悪かつたといふやうな問題にまで及んで来るが、どうしてその悪い體質をもつたかといふ事になればそれはどう／＼両親とか、両親の結婚、血統、遺傳とかいふやうな問題にまでなつて、三浦謹之助博士が「これは佛教でいふ所の因縁といふ様なものがなくてはならぬのである」と言はれたのも無理からぬ事でありまして、實際そこに暖かなある一ツの閃がびりつと起つてくるのであります。

かう考へてくると、それはひとり病氣だけではなく一切の人事がみなかういふ事になつてきてゐるのであつて、例へば吉凶禍福、成敗興亡それらが成

吉凶禍福成敗興亡

程「禍福は糾へる繩の如し」といふが如くに所謂我々の常識でわからぬ事はかりが次から次へとあらはれてくるのであります。

顔回

昔からよく申されて居るのでありますが、あの大賢亞聖といはれたる孔門十哲の上位であつた顔回が、殆ど孔子を凌ぐといふほどの立派な人でさすがの孔子も「賢なる哉回や、怒を遷さず過を貳たびせず」とまで言はれた程、學問德行に於て限りのなかつた善人が、どういふ譯か一生涯貧乏で所謂「回や一簞の食、一瓢の飲陋巷にあり」で即ち居所は裏棚の借屋、食物はわづかに命をつなぐ位な粗末なもので殆ど乞食同様な日暮しをなし、尙その上に三十一の若盛りに死んだ。故に孔子も思はず「不幸短命にして死す」と云はれて、貧乏の上に早死、人間としての最大不幸の限りをなめつくした彼を非常に惜しまれたのであります。かうなるとやはり支那の學者が「天道果して是か非か」と叫んだのも決して無理からぬ事でありませう。

天道是か非か

側面的内面的の觀察

斯様な事實は昔から今迄又内日本でも外世界の何處にでも數へきたればとても大變なもので、學問が進化してきたとか文化が進歩したとか社會が變つてきたとか思想が違つてきたとかなどといふ、世の中の表面の騷はともかくも、一度側面的内面的の側から眺めてみると、なんとも云ひ様のない、譬へ様のない實に嚴然たる冷かな大法は刃の如く將又巨人の如く宇宙の間に突き立つて、凡ての人類をにらみつけて居るかの如く感ぜられてくるのであります。

因果の道

斯うなるとどうしても又再び大聖釋尊のお示しになつた因果の道理を味ふて來ねばならぬ事になります。先づ生れて死ぬる間の此の現世と、生れぬ前の世と死んでゆく後の世とこの三つを三世とする時に、こゝにごく簡単な三世因果といふ事が言はれてくるのである、第一には順現業、これはこの世に原因をつくつてその結果がこの世にてあらはれてくるものであります。例へば法

三世因果
順現業

順次業

律を犯して刑務所に入るが如き、又自己の不衛生からして病氣を得るが如きものであります。第二に順次業とはこの世で原因をつくつて來世でその結果をうけるもので、例へば非常な悪い事をしながら巧みに法律を逃れて却つてその一代を思ふがまゝに榮華に送つて美しく死んでゆく人の如きは、たしかにその報を未來でうけるものといはねばならぬのである。第三に順後業でこれはこの世に作つた原因が次々の世以後に於いて報ふてくるものをいふのであります、尙その他にいろいろな説明の仕方もありますが、精しい事は之を省いておきまして、とにかくこの世に蒔いた種が次の世、次々の世に報ふてくる如く、又前世、前々世その以前にまいた原因がこの世の上には現はれてくる事も同じ道理であります。これは結果から原因に溯つて考へて行かねばならないのであつて、丁度今申した顔回の如きは前世又はその前々世に蒔いてゐた所の惡因がこの世に結果となつて現れてきたので

順後業

大盜盜跖

あると言はねばならぬのであります。而してこの因果は勿論善と惡との兩面に亘るものであつて、やはり顔回の時代に盜跖といふ又とない大盜賊があらゆる惡事惡行を恣にし、その上一生涯榮華榮耀の中に充分長生をして終つたといふが如きは、どうしても過去世の善因がこの世にあらはれてきたものと言はねばならぬと同時に、又斯の如き此の世の惡事惡行はこれが大なる原因となつて次の世に於いて當然報ふてくるのであります。

これに就てかういふ詩があるのであります。

顔回貧又天。盜跖兼福壽。榮枯果在天。布命何顛倒。

顔回は貧にして又天、盜跖は福壽を兼ね、榮枯果して天に在りや、命を布ける何ぞ顛倒。

でありまして、やはり、三世因果の道理でなくては、世間人事共に分らぬと

云ふことを咏んだものであります。

斯様に我々が眞剣に人間の實際をみつめる時に、恐らく同一の境過に居る者は殆どないのであります。それは確かにその原因が千差萬別であるから、その結果の上にも斯様なちがひが出来た事もわかるのであります。かういふ事は不眞面目な唯論理上の議論として佛教を研究しようといふ様な人には決してわからぬのであります。誰やらの歌に

地獄の歌

あるといふ人に地獄はなかりけり

なしと思へる人にこそあれ

ほんとうに地獄ありと信じて行を慎しみ、身を正しくし、悪を遠ざけ善にすゝみ、尙進んで如來を信する人には地獄といふものはない事になるのであります。なに地獄などがあるものかといふ風な横着な考の人は、やはりその心の上にも行の上にも罪惡をのみ造つてゆくから、そこでほんとに地

地獄

獄が出来てくるのであります。

又今少し前に戻つて、現在世に造る所の原因といふものを考へ、又この現在世における我々のうけつゝある結果といふものを考へてみる時に、どうしても之を三世に亘る所の因果を信せずには居られぬのであります。

人間の地平線

先づ假に人間の地平線を昔から云ふてある様に五倫五常とするとき、この道を守るものが普通の人間であり、この道を守らざる者を人間以下の者とし、この道以上の尙立派な徳行善事のできた人はこれを人間以上とせねばなりません。さういふ所からして不知不識に獸の如きものとか、神の如き人とかといふ言葉が使はれてあるのであります。これから考へて来る時に、どうしても暴虐無慘な、例へば數十百人を殺した所の殺人鬼の如きものゝ上に、唯一つ、死刑に處したといふが如き事では罪は重く罰は軽くて、どうしてもその平均がされて居ず、又その徳行善事が實に數千萬人の上に及ぶが如き人があつた

とした時、それに報ゆるの道が又々ありません。假に無上の爵位勳等が與へられても、それは暫くの事で又その人が死んでしまつてその子孫が如何に優遇されたとしても死んだ其の本人には何等の影響がないとせねばならぬのであります。

この善と惡との兩極端を思ふ時に實際の上に我等は未來のある事を知らねばならぬと共に、又その未來なくてはどうしても辻褄があはぬ事になるのであります。同じ様に如何なる道を以てしても、如何なる方法をとつても免れる事のできないものが前世の種の現はれた所の結果であり、壽命とか不具、痼疾、體質、容貌、禍福とか體質とか、容貌とか禍福とかといふが如きものは、大部分之であるともみても差支ないのであります。

阿彌陀經の中に憍梵波提といふ名が出てゐます。これは大聖釋尊の御弟子の十六羅漢の中の第十一番目の方で支那では牛王と譯してゐるが全く模様

壽命、不
具、痼疾
體質、容
貌、禍福

憍梵波提

が牛のようで、その喘ぐ相や、歩く有様が殆ど人間の牛だといふ風にみわてゐたのであります。この憍梵波提がどうしてこんな恐しい相になつたかといふに、その本生物語（即ち前生で斯くなるべき種を蒔いた時の事が御經の中に説かれてある）を讀んでみると、一莖の稻の穂をつんで、その中の僅か五粒六粒の粃を地に落してお粗末にしたといふ所の業によつたものである、成程この一粒の米が憶へば農家の人々の苦心慘憺の結果で、そも／＼苗代の初から五月雨のしつ／＼雨のさ中の植ゑつけ、夏の稼の九十日、黒汗流して働いた農家の人々の苦心慘憺の汗と油のカタマリであるものを粗末にしたる罪によつて、次の世にはつひに牛に産れ、生れ代り死に代り五百世の間その牛と生れ、やうやくその次に初めて人間に生れ出で、終に釋尊の弟子となつて、羅漢の悟まで開かれたけれども、長い間の牛であつた餘習が残つて、その相や模様が全く牛に似て居つたのであると説いてありますが、實に宿業の

恐ろしが目の前にちら／＼と見える様な心地がするのでありまして確かに前世の臭味が残つた一つの證據であります。

宿樂免れ
難し

又ある書物の中に次の様な事が書いてあつた。それは昔越後のある禪宗のお寺の庭の中に土の中から毛の様なものが出て、これが丁度髯の様になつてゐるので、はて不思議な事である、この清浄な女など居らぬ禪寺の中にけしからぬものがあると、だん／＼調べてみて、その毛の所を掘りかけてみたところがなく／＼深く、終に一丈二尺ばかり掘つてみるとそこに石の唐櫃があつて、その唐櫃の隙間から出てきてゐたのである。いよく怪んでその蓋を取除いてみると、中に一人の修行者が居てその修行者の頭の毛が次第にのびで地上に出たのであつた。ところがその修行者は中ば目を開いてちつと入定したまゝ何とももの言はない、そこで鐘をたゞいてみるとはつと兩眼を開いた。だん／＼その入定のわけを尋ねた所が、この人は數百年前

のこの寺の住職であつて、自分には劔難の相があるからこの難を免がれるためにかうして棺の中に入定して彌勒菩薩の御出世を待つてゐるのである、と申されたので初めて事のわけがわかつた。そこで再びこの石の棺に收めやうとしたけれども、かゝる大徳をみす／＼地の下に埋めるといふ事は勿體ないといふ所からして、そのまゝ御堂の側に安置して置いた。ところがその後盜賊が這入つて、何もとるものがなかつたために、憤怒のあまりに、この大徳の首を打ち切つて行つたといふ事である。これは甚だ怪奇な話のやうであるけれども、しかし宿業の免るべからざる事にとつては實に正しい例證であると思ふのであります。私等には右の如き事例が何のこたはりもなく受け入られる事をほんたうによろこんでゐるのであります。

順現業の
實際

これは又あまり遠くない話で、たしか明治二十七年の事で、當時のやまと新聞に出て居つた事實談といふ事でありませう。それは奥州仙台に一人の石工

が居りました、夫婦の中に一人の可愛らしい男の子があつたが、その子の八歳の時その妻がふとした病にかゝり、それが元で終に歸らぬ旅に赴いてしまつた。なに様男の手一つで子供の養育も出来かねる所から、親類や友達の手ついで後妻を娶つたのであるが、この後妻はなか／＼のした／＼かもので器量はよかつたけれども、心ざまの穢れきつた女で、その夫が石工の事であるから旅に仕事に出歩くのを幸、あられもない奸夫を引き入れて不義の快樂に耽つて居つた。そこで邪魔になるのは先妻の忘れがたみの男の子、依つて何時も家の外に追ひ出して、たま／＼歸れば打ち打擲、外の見目も哀なほどであつた。ある夜奸夫を引き入れて酒を飲んでゐるところにその子がふつと眼をさました、そこで腹のたつたま／＼大きな石臼をその子に被せて、勝手にしろ、とすててゐたのである。所がこの子は泣き叫びながら何とかしてこの石臼から出ようと一生懸命にもがいたのであります。さりながら何といふても

子供の事なれば力も及ばず苦しいま／＼に大地を掘りくじりながら、どう／＼苦しみ苦しんで悶へ死をしてしまひましたが、それがために左右の指の爪は全く離れてしまふてゐたのであります。さすがの奸夫奸婦も驚きました、が、ともかくそれを病死とつくらうて葬式をすまして本夫に知らしたのであります。そこで父親は可愛い子供の死んだと聞いて、あはてふためいて稽ぎためた、五六拾圓の金を持つて急いで歸へり、すぐに亡き子の追善を營まうと話すと、その奸婦はそら涙を流して夫を慰め寺にもやらず、その夜ひそかに奸夫と示し合せ之を絞め殺しその金を奪ひ、手に手をとつて東京へと逃がれて居りましたが、その後生みおとした子供は不思議な事、五本の指が五本とも一本も爪がなかつた。それをみた奸婦の母親は忽ち氣が狂ひ、そのまゝ家出をして川崎驛で狂犬に咬みつかれてそれが本となつて終に死んだのであります。さうして奸夫も後には行き斃となつて、果敢ない最後を遂げた

いふ事でありませう。

前の橋焚波提や修行者の上では前生の業といふ事がはつきりと見ね、この事實の上には順現業といふ事が又明かに見ねて居ります。一つの石を静かな湖の中に投げ込んだ時、どうして水玉があがらずにすみませうか、又どうして波紋が起らずにすみませうか、風が吹けば必ず木の枝が騒ぐのでありませう、蒔いた種は必ず萌ね出でませう。我等の心の内に又體の上に口の上に働かせたところの恐ろしい恐ろしい悪業がどうして報いなくして終りませう。どうして芽生へなくしてやみませう。しかもそれが小因大果の法則である事を思ふ時、一粒萬倍といふ言葉はものゝはでもないものであります。私ども自分自身の上に燃上つた腹だちの炎を思ひましても、それが天地を焼き盡すほどの強さ、ものすごさを考へて來る時に實にこの身を大地に投げつけて打ちたをされるほどに恐ろしさを感じてくるのであります。

小因大果

無責任の
放言
真劍な實
際

何事も無責任な薄つべらな不眞面自な云いつばなしな考からは、凡ての事が皆疑の的となつてゆくのであるけれども、この事實に直面した例へばあなたの如き病の床に呻吟してゐられるその眞面目な實際から、たん／＼と思案の糸すぢを辿つて考へて來れば宿業といふ事も因果といふ事も明々白々としてはつきりと眼の前に廣げられて來るのであります。實に「高い山から谷底みれば瓜や茄子の花ざかり」といふが如き見地に立つて自分自身の事實を眞中にして、その過去前世の長い間にどれだけの恐ろしい罪を作つたか、惡を行つたかと考へて來れば、さういふ事が事毎に焼金をあてられるやうにピシリ／＼と應へて來てほんとうにあまりに吾身の過去の恐ろしさに身振せねば居られぬのであります。而して又吾々がこの人間に生れてより今日迄の過去の生活を考へ、現在の日暮しを見つめて來る時に、現に受けつゝある所のその恐ろしい刑罰や、尙且つそれにだに懲りもせず、ひねもすよすがら腹だち

そねみ、怒り恨み呪ひ誹つてゐる自分の現實に對した時はあまりの醜さ、しぶごさに氣絶したい程であります。

内観内省

病は内観の時期であり、内省の好機會であります。健康な體には世の中の凡ての仕事が私を引き廻して、どうしても内省の眼を開かしめぬのであります。然るに此の病の爲に、しんみりとして自分といふものを考へ、又自分の過去前世、前々世なるものをも考へ、進んで死といふ事、死にゆくこと云ふ事、死んで後の世といふ事を考へ、さうして尙親子、兄弟、朋友の中に取り包まれてゐる自分といふ事を考ふる時この自分はポツンとしてこの世の中にはほんたうの一人ぼつちであるといふ孤獨の觀に迄入ることが出来るのであります。こゝに古聖が「病は善知識なり」と仰せられたのはたしかに由ある事であると思はれるのであります。

十二 不安の除去

運命罪惡
智慧慈悲

御親の佛

斯様に私なるものが眞劍に内省され内観されて、自分の運命や又自分の罪惡といふものがはつきりみわて來た時に、こゝには只私の上に無限の智慧、無限の慈悲を垂れて私の罪惡を引きうけ、さうして私をこの迷の世界からほんとうな悟の都であるあの眞實の世界へ呼び迎へんと立ち給へるみ佛を信せずには居られぬのであります。このみ佛は私の眞實のみ親であらせられる、されば私は遠慮なく、氣兼ねなくほんとうの親里に歸らせ、て頂く事を喜ぶばかりであります。法然上人が「死なば淨土に參らなん。生らば念佛稱へなん。とてもかくても己が身は。思ひわづらう事ぞなし」とおほせられたのは確かにこの風致であらうと思ふのであります。こゝに一切の不安が全く除き去られるのであります。

第四信 仰 篇

九〇

一 死に直面して

大分話が長くなりましたが、病氣に對してその病を恐れてならぬ事や、その病を恐るゝ事のいらぬ様になるわけが、らを相當に取り廣げてまゐりました。これを一纏に申せば、第一には病は人間として免れ難き事、第二にはその病氣は病氣になる原因が前世にあるか、又この世にあるかといふ事、第三にはその病に癒る病と癒らぬ病氣との二ツがある事、第四には病氣に對して宿業觀の上に立つて出來得る限り療養する事、第五には未來の安住を得る事、ざつとこの五ツ通りになるのでありますが、かういふ事になれば所謂病氣にあつては病氣に處する覺悟が出來て、騒がずもがゝず、悠然たる療養生

虹の七色

活にいそしむ事が出來るのであります。而して又たとひ不幸にして思ふがまゝの療養が出來ないといふ貧しい身であつても、ほんたうにこの自分自身の業といふ事を觀じてくる所に、そこに大きな力が湧き出て來ると共に、心の上の苦痛を省き去る事ができるのであります。殊に死んでゆく先が明かに如來の御國に生れさせて頂くといふ安心が出來てゐたとするならば、如何なる苦しき病の上にも、丁度今にも消えゆく虹が太陽の光を受けて奇麗な七色を現すやうに、なんともいへぬ樂しき美しさ、快さが、その苦しい病の床に訪れてくる事は間違ない事であるのであります。

かう申せばとて、信仰ある凡ての人が盡くその病床や死の最後が、必ずみるからに雄々しく樂しきものとのみ言ふのではないのであります。そこもやはり業の現れとすれば、死の縁無量なり、ほんとに苦しんで苦しみぬいで、恐らく念佛の一聲すらも稱ふる暇なく苦しみ死をする人もあらう、水に溺れ

死の縁無量

九一

九二
て死ぬ人、火に焼けて死ぬ人乃至野に仆れて死ぬ人、その他天災地變のために斃れる人、又は自動車が顛覆し、汽車が衝突し、或は又盜賊の凶刃のために、或は誤つて人の射たる鐵砲に殺されるなど、數へきたればはつといふ間もなく死なねばならぬ人も少くないのであるから、かういふ場合はいたし方もないのであります。故に我々の信仰では臨終の善惡を問はぬのであります。唯凡てをみ佛の御誓にまかせ奉るばかりであります。私がかういふ心持からして、ほんたうに如來を信じ往生を信じた人々の死に直面し、尙その人々が死を如何に受け入れたかについて、三五の實例によつて今少しく申し述べてみたいと思ふのであります。

二 病を業報と感じたる人

ほんとうに病を業報と感じて、そこに如來の御救を喜んだ人の上には、何とも云へぬけなげさと強さと喜ばしさとはつきりとみわけて居るのであります。

すつこれについて私にはあまり多くの實例を持つてゐるのであります。その中の一ツを今擧げてみたいと思ふのであります。

それは今を去る事二十一年の昔、即ち明治四十二年の事でありまして、當時和歌山市鷺森別院の勘定をして居られた安川庄兵衛といふ篤信なお同行の話であります。この老人は實に非常な厚信な人で、別院の事や、本山の事や、又地方の法義のためには常に寢食を忘れて盡された人でありまして、その當時の私としては丁度年頃が私の親とあまり違はなかつたために、私はこの老人から、全く子供のやうに可愛いがられてゐたのであります。獨私だけではなく、當時の本山の布教使でこの老人を知らぬ人は殆どないと言つてもよいほどでありました。丁度四十二年の春の頃から食道癌にかゝられてその年の十一月十三日に亡くなられたのであります。私は極めて親しくして居た所から丁度その年の八月の末ツ方に、四日間、この老人の枕頭に歎異鈔

鷺森別院
勘定安川
庄兵衛氏

を講じたのであります。この時は老人の病も大分進んで居て、已に自分も秘かに決心してゐられたのであるから、その法味讃仰の姿は實に立派なものであります。此の時

「今まで人様が私を正直者だとして通してゐました。間違はぬ人だと許してゐました。堅い事ならあの人だと言つてくれてゐました。私はこの人様の言ふて下さる言葉を誇としたために、心の不正直を何時も何時も正直の袋に包んで、人様を欺いてまゐりました。なんといふ恥しきでございませうか、もうこの化の皮のやぶれる時が來ました。今日はこの通りお懺悔をいたします。私は人さまから喜ぶ御同行だとか、ありがたい人だとか言はれるのを誇としたために、相當に殊更な喜を見せつけた事が今更ながら恥しくて申さう様もございません。斯様に人を欺き自分を偽つて來たのがこの庄兵衛であります。ほんとの悪人罪人とはこの庄兵衛を置いて外に

罪惡の懺悔

はないのであります」

とつひに泣きふしてしまはれた。やゝしばらくすると

「あゝあゝいよいよ前世の宿業といふ事が間違ございません。業報の恐しさは身にしみごとく應へます」

これを御覽下さい、よくこれを御覽下さい……とて首のあたりの食道癌を指されて

「これですく、たしかに私は、この食道癌のために命をとりまして、婆をお暇するのでございませう、癌はとても癒らぬといふ事でありませうから間違なうこれがために私の命は取られますにちがひございませう、かうなる事もちやんと前世から定つて居つた宿業でございませう……飲まうとしても思ふまゝに飲まれませう、食ふとしても思ふまゝに食べられませう、苦しうございませう。つらうございませう。多くの人の中には割合に

九六
 樂に死んでゆく人もあるのに、私は申さば五分ダメシに、この病氣のた
 めその責めさいなみをうけ、そろ／＼と死の門に近いて行かねばならぬの
 でございます。これが宿業でなくて何でせう……お話に承りました餓
 飢道の一部を味はして頂きました、この頃の日暮しは全く餓飢道だと思ひ
 ます。……私の上に現はれましたこの業報を味ひます時、前世からの因
 縁がはつきりとみえます。さればで、おかげ様で「助けるぞ」この如來
 の御勅命を信じさせて頂いた、その「信ずる」まゝが佛になる種となつ
 て、やがて息切れ眼を閉づると共にあのお浄土にまゐらせて頂いて、間違
 なく悟を開かせて頂きます。……この苦しい一日々々が又楽しいお浄土
 への一日々々の旅だちかと思ひますと……あゝ何たる幸福せでございま
 せう」
 と再び泣き出されたのでありました。

さうしてその年の十一月の七日、その老人の檀那寺である善稱寺で（宇治
 田貞亮氏の寺）宗祖の六百五十回忌の布教をしたのでありますが、これも老人
 が生きてゐる間に是非この御法事をつとめてもらひたいと云ふ切なる望で開
 かれたのであるから、その七日には病をおして檀那寺へ参詣をせられた、さ
 うしてその時我家に歸つた老人は
 「あゝこれでこの世での檀那寺への御報謝が先づ終つた。御浄土で御開山様
 にも、御詫びが出来る様になつた、まことにありがたい事だ」
 と涙と共にこつと笑はれた顔が、今だに私の眼から消ぬのでありま
 す。私はそれから和歌山市の南の方の有田郡湯淺へまゐりまして十二日の
 午後の四時に再び老人を見舞ひました、この時はもう大分病も悪いやうであ
 つたから、その枕頭に最後のわかれのことを述べたのであります。その時
 老人の喜びは何とも譬へ様のないほどであつて、その長男正次郎氏へ御法義

相續の事を遺言し終つて、

「あゝもう娑婆の事はすみしました。もう大抵宿業もつきませう、随分惱みま
した、苦しめられました。もうお終ひでせう、娑婆のおしまひがお浄土へ
の初旅、あゝあゝ何たる仕合せ者でございませうか」

としばらく眼をつぶつて居られたが、やがてぱつちり眼をひらくなり

「萬歳……あゝ萬歳……生々世々のはつごとにあゝ今度は……萬歳」

と呼ぶなり叫ぶなり又再び

「あゝ何と仕合せ者でございませうか」

と初の高い高い萬歳の聲と後の沈著な静肅な喜びぶりに私はつひに泣か
されたのであります。

この間の消息は次に掲げておきます二ツの私の手紙がよくそれを云ひあ
らはしてゐると思ひます。

書簡の一

(明治四十二年九月、老人の病床へ送りたるもの)

飛隙行く駒の足はやみ、ともに御佛の御慈悲の尊さに、涙ながらに御別れ
せしは、はや、二十有餘日の過去と相成申候。たへられざりし夏のあつ
さも、いつしか秋の冷氣に、うちはらはれ申候。

着京後、直ちに御伺ひ可申候處、かれこれと多忙の爲め失禮致居候。誠
に御老人の御病床に、御別れ申せし折の御言葉、思ひ出すに情せまり、こ
ゝろふさぎ、涙禁じ難く、是につけても、實に人の情の弱さに驚くものに候。
然しながら、あのごきの涙は決してけがれたる劣情とのみは感じられず候。
恩愛は恩愛に候。涙は涙に候。然も凡夫の恩愛のみにあらず。まよひの涙
のみにあらずして、此の恩愛には、再會を期するの恩愛もこもり居候。此
涙には、あの御浄土にてうれしき二度の御面會のときの涙とちがはぬ涙も

もこもり居候と存申候。しかればいよく御親の御名の尊さをよろこぶのみに候。あの時の事ども思ひ出すも南無阿彌陀佛に候。今日とても、南無阿彌陀佛に候。また南無阿彌陀佛の外、何にも見出す事の出来ぬものに候。南無阿彌陀佛、此六字のうちには一切のもの、ありとあらゆるものふくまれ居るものに候。

過日來の御手紙にも今日まで長へし事、其の他の事、凡て御佛の御はからひにて十年以前の今日と、十年以後の今日とを比較して。御佛の御慈悲御喜びのよしうけたまはり、飛びたつ程うれしく候。まことに仰のごとくに、御老人の御病氣に就ての御家族の御親切も、御佛の御心いたらぬ他の家にはとても見られぬ事に候。そのはずに候、南無阿彌陀佛の御働きに候もの、御喜び被下度候、御喜びなさるべく候、思ひまわせば、六字のうちにつゝまられて六字のうちにおきふしして、ひかるゝ力も六字の御名、お

さるゝ力も六字の御名、やがて御佛の國に生れさして頂くものに候、うれしき事に候はずや。

世の法義の味を知らぬ人は、あなたの御病氣を苦しき病氣とのみ眺む可く候へ共、私は老人の病氣はたしかに、御佛の御方便とよろこぶものに候。定めし御老人も御同感の御事と存候、尙あの御苦みの上にうめき、さけぶ等のくるしみ、引つ切りなしに續き候ときは、御佛の御慈悲を忘るゝやも知れず候。然るに御老人の御病氣は、苦の中に或時間あれば御慈悲よろこぶ助縁としては、まことに都合よき病氣に候はずや、病は善知識なりとの御言葉、しみぐ御味被下度候。御老人の現在の上には、御親の御慈みが御家内の人々の心を透して親切なる看護となり、やさしき心となり、かげにひなたに老人を思ふの同情となりつゝあるものに候。

凡ての友人は、みな四方より來りて法義をすゝめ候にはあらずや、是れ即ち御佛のかぎりなき御慈悲の變化に候。大悲の御親の御慈悲の御まことが、その相かたちをかへて老人にせまり來るものに候。御仕合せに候はずや、老人の枕頭、目にうつるもの、見ゆるもの、皆悉く御佛の直接の顯現に候、病床に御家内の御親切を思ひ給はゞ、是を透して西方にいます御親の御慈悲と御喜び被下度候。

日のまさに、和歌山城頭をかすめて、殘光西に入らんとするとき、彼の西方の金岸を思ひ、光輝く相好金山の彼の淨刹を思ひ浮べ被下度候。安心決定鈔に仰せられ候。

「依報は寶樹の葉、ひとつも極惡のわれらがためならぬ事なければ、機法一體にして南無阿彌陀佛なり、正報は眉間の白毫相より千福輪のあなうらにいたるまで、常没の衆生の願行成就せる、御かたちなるゆへ。ま

た機法一體にして南無阿彌陀佛なり」

ど。極惡のわれらが爲に出來たまへるこの淨刹を御よろこび被下度候。機法一體に候、とるも、すつるも、喜ぶも、信するも、南無阿彌陀佛の外無之候。

「ひと息も近づくものは西の岸、この喜を何にたごへん」

喜びく進めさしていたいき、近づかして頂く、西方の樂果を待つの外無之候。慶哉の思召も常に老人の經驗さるゝ處と存候。乍然御老人よ、さればとて御身の心のうち美しくきれいになりしには無之、貪瞋二河の煩惱は滔々として狂煙まどひ、白波おどり、そのすさまじさ筆の外に候、煩惱もやまず妄念もやまぬものに候。目を閉づるの朝まで、息を絶ゆるの夕まで、かわらぬものに候。

「地獄行に候へば、かわる氣づかひのなきものに候。必墮無間は間違ひな

一度此の心裡を思ふとき、慄然として身のおきどころなきを知るのみに候。煩惱深無底、生死海無邊、この善導様の御言葉も、曠劫より迷ひ來りこの御いましめも、出離の期ある事なしとの御教化も、思へばく、其事さばかり聴聞し候事の、うらはづかしさ、申様も無之候。如何御思召され候や。

嗚呼、前は無始以來、後は無終のそれ迄、うかぶせのなき生死流轉のきわみなき私、煩惱惡業にとらわれたる私、佛願の不思議ましますば、他力の御教なかりせば、此身と此の心いかにせしものぞ、今や時節到り、宿善開發し、機感相應し、大悲招喚の御聲をき候。何たる仕合に候ぞや。攝取の光明の懷にある身に候へば急ぐにはあらず、近づく御淨土をまじうくるのみに候。強き御慈悲の如來の御引取を待つばかりの身と相成申候。

夜四隣しづかに虫聲いと身にしむの時、御淨土の樂果を思ひうかべ被下度候。

「まぢかねてうらむとつげよみな人に、いつをいつとて急がざるらむ」十劫以來御まぢかねの御親は、いかに我等をまぢわび給ふらん。世々生々に、ちぎりし我等の父母と兄弟は、さきだちし法の友と、やがて參らせていたく我等のうわさの、いかに賑へる事に候やらんと觀じては、とびたつほごうれしく候。

此上は念佛の口にかぶともうかばずとも、喜ぶとも喜ばずとも、病のくるしみ、よし虚空をつかむとも、いましばらくに候。御まぢがひなき御佛の御誠に心のなやみ、うちはられ申す事に候。何たる不思議の事に候ぞや。これ即ち誓願の御不思議の御力に候。誓願の御不思議とは、此まの御救ひに候。此のまの御救がありがたく御座候。謹で宗祖上人の御言

葉を寫しあげ候。

「如來ノ作願ヲタズヌレバ

苦惱ノ有情ヲステズシテ

廻向ヲ首トシタマヒテ

大悲心ヲバ成就セリ」

いやましに、御法義御喜び被下度候。南無阿彌陀佛。

明治四十二年九月二十四日

京都本願寺總會所にて

龍 叡

(老人の死後其の遺族へ宛てたるもの)

嗟人世凡て夢に御座候、十一月十二日と十三日は是れ私の記憶より忘るゝ能

はざる處に御座候。

因縁と申すべきか、不思議と申すべきか、かくまでとは思はざりしに、何
となく御伺もしたく、御別れもしたく、又其の別れの、つらきゆへ湯淺よ
り神戸へ参らんかなごとと思ひしも、是も亦思切る程の勇氣もなく、夢の
如く又現の如き間に和歌山に着き、かきむしらるゝ思ひの内に、老人の病
の床をおとなひ候へば、僅か三四日の内に、かく迄もかはらせ給ひしかと、
一度は驚き、一度はあきれ、一度は悲しみ、是亦夢の様なる感じ致申候。
老人の領解の一言一句、恰も是れ佛陀直接の御言葉として、私の心胸にひ
しびしとこたへ申候。折りから只何となく、湧き出る思のまゝを臆面も
なく、遠慮もなく、正次郎氏(長男)に語り出で申候事の、是亦偶然と
申し候べきか、御催促と申し候べきか、吾ながら尊く有難く存候。殊に
老人の肺腑より迸り出る言々語々、如何にしても泣かざるを得ず、叫ばざ

るを得ざりし當時を思へば吾ながら夢の様に御座候。

「正次郎さんた、のみますぞ」……とは、嗚呼何たる尊き然も嚴なる言なりしぞ。

「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな」

この闇は、決して愚痴の闇にもあらず、迷の闇にもあらずして永久の御親たる大慈大悲の御佛の切なる御聲と聞かれて髣髴として大悲の尊影を拜する心地致し申候。

只の一夜こへてあくる十三日……責めてこの一週間位はと思ひし事も空頼みにて候ひしか……今や只残るは寫眞の俤のみと相成申候。

あゝ老人の形骸去つて跡なく、和歌山の城、紀の川の水、只々思出の種となり申候。是亦夢に御座候。

形の老人は、この世にましまし……候、到底尋ぬべからざるの人となられ

候。されど、この予の胸中に在します老人と悟りの國の老人とは永

久に失せ給はず候……永き別れにても御座なく候。追而御目にかゝ

り可申候……否常住不斷に予につきまごひ下され居候。念々稱名

の間に、常に御物語り可申候。何もかも夢うつつの世にこれのみは誠に

候、眞實に候。

吾等がなげき、悲しみ、苦しみ、さわぎ居候。この様をさぞあはれと思召

して、ながめ給ふならんと思へば、實に耻しく又なつかしく候……各

方にも定めて予と同じ思ひに毎日を送り、西方を偲び給ふことと存じ上申

居候。十一月二十日東京よりの歸るさに、初めて御凶報に接し、只々夢

の如き思ひの内に、幾度か老人を夢みつゝ、この地廣島別院の御本尊前に

静かに讀經念佛して、往事を追懐し今日を考へ、悲喜と慚愧との涙にかき

くれ申居候。

あゝ、今や七寶樹林の花咲き匂ふあたり、八功德水の水清き邊りに、伽陵
瀨伽の囀るる聲、微風寶樹を吹くの音と共に、この界の我等をみそなはし
給ふを觀じ來れば、實に〳〵有難き尊き極みに御座候。嗚呼。

「吾や先き人や先かは白露の、きへてまた逢ふ法の友人」

明治四十二年十一月末日

廣島別院の御尊前に讀經しつゝ

龍 叡

病牀は極樂の門

かくして安川老人の喜の一生涯はつきたのであります。老人が死の前に
「この病の床がほんとうの極樂の門であります。まざ〳〵と宿業をみつめさ
して頂いた娑婆の終であります」と喜ばれた通り、さしもの苦しかりし病も
醫師すら驚くまでに苦痛の少かりし、そのおだやかな輝ける病牀の生活の
上に信仰からの慰が如何に力強きかを味ふ事ができるのであります。

三 死に安じたる人

死出の獨り旅

人間は必ず一度は死ぬるものと覺悟して居つてもそれは自分の愛する
凡ての人々と別れてゆくといふ悲しさ、さうして唯一人、この世からの死
出の旅だちをする寂しさ、そこに不安が伴ふといふ事はあたりまへの事
であると言はねばならぬのであります。しかしながらこの不安であるべ
き筈の死に直面しながら、ほんたうに死にたくないといふその執着のそ
のまゝの上に、それを超越して居るとまでに眺め得らるゝ程、死に安ん
じたる人の上には、ほんたうに尊い驚異の眼を開かずにはゐられないのであ
ります。

執著を超越して

修養の人

先づこの死に安んじた人を次の様に考へてみたいと思ひます。それは一ツ
には修養的であり、二ツには信仰的であります。修養の上からその死に接し
た人達には實に莊嚴な又嚴肅な姿をみる事ができます。例へばかねてから常

に死に對する所の覺悟が、儒教などによつて得たるところの天命觀や、その他によつて極めて落着いた人、その他心ある昔の武士といふ様な人たちの最後には随分立派な又洒脱な人たちも少くないのであります。名高い蜀山人太田南畝が

太田南畝の辭世

今までは人の事だと思ふたに

おれが死ぬのかこいつたまらぬ

と言ふた臨終の警句や、又山田又助といふ武士がその最後に

山田又助の辭世

散るもよし吉野の山の山櫻

花に類ひし武士の身は

北條氏政

雨雲の覆へる月も峯の霧も

はらひにけりな秋の夕風

北條氏政の辭世

淺野内匠頭の辭世

又名高い淺野内匠頭長矩は

風さそふ花よりも尙我は又

春の別をいかにとやせん

エリサベス女王の臨終

と詠んだ事や、處女大王とまで言はれたあの名高いエリサベス女王が七十二の年、崩御されんとするその最後に小指で自分のやせ細つた頬をなでつゝ側の女官に「これこゝに少し紅を……」と申されてその最後を飾つた如きは、高風清節、なんどなく襟を正しくしたい様な氣持がするのであります。それと共に又その下からなんどなくそれだけ淋しい感じが強く起つてくるのであります。憶ふに修養の結果として死に安んじたる人の上には嚴然なれども淋しいといふ事を深く深く見せつけられるのであります。

之に反して信仰の人になると、これら修養の人達の様に割合に嚴肅な點は少いやうに見わるけれども、何となく賑しい所が現はれて居るのであります

信仰の人

す。先づ以て我が開祖親鸞聖人は

別路をさのみなげくな法の友

又會ふ國のありとおもへば

とか

こひしくば南無阿彌陀佛を稱ふべし

我も六字の中にこそ住め

とか

「我が歳きはまりて、安養淨土に還歸すといふとも、和歌の浦曲の片雄浪の、よせかけく歸らんと同じ、一人居て喜ばゞ二人と思ふべし、二人居て喜ばゞ三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。」

「久遠劫よりいままで流轉せる、苦惱の舊里はすてがたく、未だうまれざ

る安養の淨土はこひしからずさうらふこと、まことによく／＼煩惱の興盛にさふらふにこそ、なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちかちかなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり」云々(歎異鈔)と仰せられたるが如きは何ともいへぬ寛容なさうして賑しさを、はつきりと拜む事が出来ます。行手の光に照され、さうして人生の全部を透見した人の上には、さうあらなくては又あるべきがあたりまへであります。かくかいてきますと今から丁度七年前のこの六月の二十日に亡くなりました私の母順勝院貞猷尼の臨終を思ひ浮べるのであります。

貞猷法尼臨終記

午後六時頃、再び博士の診察を乞ふた。彌々望みの綱は切れかゝつた。

「もう三時間より保てまい」

何と云ふ酷い言葉だ。「三時間?」「三時間!!」

人々は弾きかへされた様に、頼るものも無くなつた。和上の歸へりは十二時だ。皆んなが一人々々指を折つた。そして皆んな暗らい影に蔽はれて仕舞つた。

親族方は大抵集まられた。

七時半過ぎだつたらう、お別れのお勤めを始めた。

病室の床の間に、御名號を飾つて、皆んなで着座した。鳳龍さんの、調聲で正信偈が静かに誦み始められた。蠟燭の火が微かな音を立て、燃わて行く。お別れかと思ふと、皆んなの聲が曇りがちに、とぎれ／＼に續いて行く。御老母様の念佛が微かに、たわ／＼に聞えて来る。平和な音律で、私の胸は幾たびかつまつた。お勤が済むと、鳳龍さんはたまりかねて、泣き倒れられて、獻献きの下から、お別れの言葉をかけられるのであつた。……「ほんたうにお世話になりました、きつと後から参ります。待つて居て下さい……」

後は皆んなの、獻献きの聲と共に曇つて行くのであつた。其の時、御老母様の口が微かに動いて、平穩な、懐しみ深い聲が流れ出た。

「何故に泣くの？」静かに人々を見渡されて、そして、また、静かな聲で「何あにも、泣く事は、あるまいが、御浄土だもの……」

そうだ、何も泣く事はないのだ。安養浄土に還歸されるのだ。さう思ふても、涙はとめどなく流れる。

私はちつと手を延ばして、御老母様の手先に沈滞しかけて居る静脈の血液を心臓に送るべく、御手を撫でた。あゝもう冷わか／＼つて居た。

散大された瞳で、ちつと私の顔を御覧になつた。なつかしい瞳だつた。

「余田さん、頼みます、しつかりねエ」後はもう聞えなかつた。あゝ私達の協會の事をかうまで思ふて居て下さるのだ。

「本堂で、お勤を……」「いつものお勤をねエ……」
 私達は本堂で、勤行をした、そして再び病室を見舞ふた時、もう静かに
 くんに眠りかけて居られた。御親族方のお別の水も濟むで居た。私達も最期
 の水を、かわるく差し上げた。外には嵐がたけり狂ふて居る、電燈が急に
 消れて仕舞つた。嵐の爲めに停電したのだ。私達は燈火の用意に室を出た。
 やがて自づと電燈はついた。其の時深いく眠りに、永遠の眠りに静かに墜
 ちて行かれた。時方に午後八時十三分、別を惜しむ、人々を後に、静かに
 往生されたのだつた。崇高な、平和な色が、その次第々に死顔の上に満ち
 て来る。

(大正十二年六月末日・洗心學會・余田生記)

思ひ出の記

思出の記

「おばあーさん」此の言葉はも早や再び交はす事が出来なくなつた。それは

六月二十日の夜八時十三分であつた。はや今日は祖母が此の世を立つてから
 十八日になる。門徒一同の中陰の供養が行はれてゐる。四百からの來客で寺
 内は上を下への混雑を呈してゐる。その凡ての光景が種々な感想の内に私を
 捕へた。思へば其の夜の光景が繪の様に現はれて来る。

嗚呼、不定は世の常とはいふものゝ、あれまで達者であつた祖母が僅
 か四十三時間位で私達を置きざりにしてあの世に旅だうとは思はな
 かつた。願へば願ふ程胸は張り裂ける様である。さうして此れは、あまりにも
 ひどい無常の大鐵槌であつた。京都からの父も東京の叔母も死に目にさへ會
 ふ事が出来なかつた。亦其の外因縁深き方々にも一言の御挨拶もせず死
 で仕舞つた。

其の日の午後の四時頃父から今夜一時鳥栖着との電報が來た、それは丁度
 大學の先生と主治醫とが立會つてゐて下さつた時であつた。診察が終るとす

「何時間もてませうか」父が今夜の一時に歸へるのです。「それまではどんな事があつても、もたして下さい」せめて父の歸へるまでは心音だけなりとも續けたかつた。最後の水だけなりと捧げてもらひたかつた。然し大學の先生から「早やチャノーイズが下顎の處まで顯れて來てゐる。此處三時間がどうでせうか」と聞かされた時は一時に世界が暗くなつた様であつた。

愈々祖母の最後は三時間に迫つた。三時間の後には萬事は事切れる。祖母の温い言葉はもう二度と聞けない。まだ受けねばならぬ教へは多い。話して頂きたいこと聞かして頂きたいこと、それは千萬無量にある。然れども命は三時間？ さうして病の苦しみは重くなる、とても口からの話を要求する事は出来ぬ。……嗚呼、父との最後の別れも出来ないのか、久しく會はない東京の叔母との別れすら出来ないのか……看護の我々の心は、

りさける様だ。……せめて父だけには會つて貰ひたい。さうして遺言がして頂きたい。また聞いて頂きたい、矢張り之も覺束ないのか、祖母への今生の最後の些少の願ひも聞き届けられないのか、どこまでも無常の風は無惨に吹きゆくのか、たうたう母や其の他と語つて父への遺言を祖母に聞くことにした。然しその機會はない。矢張り昏睡状態にあるのだもの、

それからカンフルやチガレンの注射が三筒も終つた七時頃であつた。主治醫から「とても注射を續けてもお父さまの御歸りまではむつかしい。注射をすれば御本人を苦しめるばかりである。」と遂に最後の宣告を受けた。

此頃より不思議にも昏睡状態が回復して是から最後の一時間有餘の意識はまことに明瞭なものとなつたが、意識が回復すればするほど腹痛は再び加はる。此時の腹痛は餘所目にも當てられぬ程であつた。然しこの苦しい中に、我等の愛別に臨んでの最後の望みはかなへられた。即ち極く斷片的ではあつた

が家事の總てを遺言して呉れた。この遺言こそ祖母の家を思ふ赤心からの發露であつて、まことに千萬無量の言葉であつた。而も私共へ「必ず御浄土の再會を忘れてはならぬぞ」とそれは／＼親切に一人／＼へ別れの諭しをして呉れた。それは佛様の直々の御言葉の様に、とても之が病人とは思へぬ様にハツキリと、……かくまで立派に死を覺悟しての遺言、何一つとりみだしたところのないのに、京都から歸りを急いでゐる父への遺言は何一つない……たうとう「お父さんに御傳へは何にかありませんか」と尋ねた。醫者へ注射を願つたのも、注射で祖母を苦しめたのも、たつた一目會つて最後の別れがして頂きたがつたからの事だけである。何んと答へるだろう。何んと言ふだろうか、自然と私の胸はをの／＼いた。然しその時祖母は「いやお父さんには何もないよ、何んにも言はなくてもよい。御本山の御用中だもの、つもの話はやがてお浄土でゆつくりするから……」なんととした尊い清いけなげ

な遺言であつたらう。信仰の厚い祖母は本山を敬ふの念厚く、今は總會所の御用で京都だといふ念ひが深く刻まれてゐたらしい、

これほど祖母の方では死を決心してゐるのに、どうしても御別れの御勤めをしませうと告げる勇氣さへない。

其の内にも死は刻々と迫り来る。七時四十分であつた。思ひ切つて、もう夕方ですから御勤めをしませうと告げると、苦しい息の中から一刻も早く／＼と答へる。枕頭に侍つてゐる約十名ばかりのものが一緒に御別れの御勤めをした。はじめはよほど苦しかつたのだらう、ナムブツ、ナムブツと稱名してゐたが苦しいあの苦痛の中から三重目だけは助音についた。それも極めてはがらかな聲である。どうしてあんな麗しい聲が出たのだらうか先の祖父の古例にならつて信心獲得章を拜讀した後の、御念佛の聲などは今なほ耳にあり／＼とこのこつてゐる。而して、それが濟むと祖母が高橋

さん達へ本堂のお勤めをして下さいと頼む。本堂で御勤めの進んで行くのにつれて祖母の最後も一刻々と近まる。かうして御別れの御勤めを済ましてから約二十分も過ぎた八時十三分終に祖母の萬事は事切れて仕舞つた。せめて父の歸へる迄この念願も水泡に終つた。……かうして私はあの懐しい慈しみの深かつた祖母と永久に別れる事になつた。噫今一度私は「祖母さん」と呼掛けたい。さうして……

あゝなんたる愚痴だ。私はあの御別の御勤めの後で御浄土の再會を約したではないか。吃度参ります。祖母さん此度はあの永久に別れない御國で會はして戴きます。……

祖母さんあなたは吃度あのお浄土から私を待つてゐて下さるに違ひないでせう。私の他出をいつも待つてゐて下さつた様に、あの御國から吃度私を守つてゐて下さるでせう。丁度私のあの病中に私を看護して下さつた様

に、さうして呼びづめに私を呼んでゐて下さるでせう、あの慈しみの深い聲で。……

(大正二十七月九日 鳳 龍)

母の臨終に遅れたる私の心

(一) 不孝の最後

追憶のま
まを
噫々不孝の子は、終に母の死期にさへ遅れて不孝の終りは其の愛別の言葉
をさへ言ふことなしに、あはれ、無惨の幕を閉ぢたのであつた。

何時までも忘れる事の出来ぬ。大正十二年六月十九日夜、毎時にもなく多く集つた聴衆に對して、午後八時本願寺總會所の高坐上の人と爲つた。五六百の集つた人達の多くは、青年と學生とであつた。前夜來引續きに、

人生には永久性と確實性の二つの無き事を力説した。

それは聖人の所謂「煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなし」と云ふ事である、如何なるものを否定しても、無常の否定は出来ぬ。刻々迫り来るものは、無常の波である。一步一步近づくものは死の暗黒である。諸有る欲望も、名譽も、此の無常の前には何等の權威もない、と、諄々として無常の原理を説いて、唯々「念佛のみぞ、まことに、おはします。」こゝに私共は、眞實の念佛を要求せねば居られない。念佛は、南無阿彌陀佛である南無阿彌陀佛は御親である。御親は、慈悲である。慈悲は恩である。阿彌陀如来は恩體である。助け救ふは恩用である。こゝに私は恩の尊い事を痛感する。近く人の恩を説き、進んで社會國家の恩、一切萬有の恩を説き、そして親の恩に及んだ。此の時、私は二十有餘年以前の學生の昔に歸つた心地がした。集まれる學生諸君に自分が學生時代の感想と、それから現在の考へとを對照して、此の二つの上から

郷里に在る一人の母に思ひ到つて、切に親の恩の尊い事を讃嘆し、進んで御佛の御慈みの深い事に及んだ。此の時、何だか一種の靈感が湧き來たつて高坐の上に耐へられぬ程の思ひにかられて涙に咽んだ。此の時故郷の母がちら／＼と目の前に見ゆる様な心地がした。……何ぞ知らん此の時は、母は既に病床に伏して居る時であつた。……説くも涙、聞くも涙、……そこで日頃の説教よりも餘程時間が経過つた、約一時間と四十分、高坐から下ると、給仕の婆やが、御使僧様、電報ですよ、「何」手に取る、開く、「ハ、ヤマイオモシスグカエレ」……天地顛倒、世界が一時に破裂した様な感があった。其れもその筈、昨日までの手紙に母は至つて元氣だ。丈夫だとあつたのに……胸中は大地震のそれの如く心の奥底から、ひつくり返つて來た。集り來たる多くの人々の驚きを其のまゝに打ち捨て、瀧川君夫妻、寺住君等の手傳ひを受けて、執行所の届けを濟すなり、車へ乗つて停車場へどかけ

つけた。

此の間、僅か一時間と二十分、自分ながら、其の準備のあまりに早く整つたのに驚いた。多くの見送りの人の聲の中に午後十一時四分發下關直行列車の人となつたのである。噫實に人生は總て無常よ。……

(二) 悶への歸途

汽車は出る、雨は降りしきる、暗を縫ふて走る、風の音も雨の音も一つも耳に入らぬ。大阪も神戸も夢と過ぎた。頭は亂れる、胸は躍る、煩ひと、亂れとは、波の様に打寄せて来る。若しもの事がありはしないかと、其れが氣に成り出して、どうしても抑へきれぬ。實際今までの生涯に又こない苦い經驗を越めた。堪へられぬまゝに、兼ねて用意してあつた催眠劑を飲んだ。姫路あたりから僅かに眠つた。福山あたりで目が醒めた。此の時雨は恐ろしい程降つて居た、風さへ強かつた。尾ノ道で新聞を讀むと、線路の破壊が

掲げられてある。胸が「ギョツ」とした。此の汽車が不通になりはせまいかと。……車掌に問ふた、「無事だ」と云ふ。やつと安心した、唯だ夢の様に現の様に、かうなれば、苦みも、悶も、通り過ぎて、殆ど無心状態であつた。ぼんやりとして居る間に、汽車は遠慮なく進む、左右の川の様な洪水の中を走るのに、その恐しさをも忘れて居つた。

夢の間に廣島を過ぎ、晝の様な宮島も毎もならば、立派なものだと云ふ感じも起らうのに、是も又見るがまゝに通つた。柳井津に着いた。車掌が、「虹ヶ濱、徳山間の線路に故障が起つたから暫時下りて下さい」と時に(二十日午後二時半)「スハ」事だ」何とも乎とも形容の出来ない、むしろるゝ様な又焼かれる様な、よく人の云ふ、「生皮を削がれる様な心持」とは之であらうと思はれた。下車した、雨は益々降る、風は愈々強い、五時半の急行列車が、開通すると云ふ事が分つた。實は京都からの途中に、二回まで母の名宛に電

報を打つた。私の心の内では、彼様な電報でも見たら、母が自分の歸ると云ふことでいくらか気分が良くなるだらうと云ふ自信があつたからである……併しもう斯成つては母の名宛に打電する勇氣すらない。それで家内宛に三時間程遅れる事を打電した。此の待合せの三時間の長かつた事は、實際もの一週間もたつた様な心持がした。「立つても居てもをられないと云ふ事をしみじみと味はせられた」……門司へ着く、危篤の電報を受取つた……「ハッ」と思ふてからは全く病める人の姿と同じものになつた。理智も感情も一時に其の働きを中止した……もう書くまい云ふまい、……急行列車が自分の郷里の基山驛を通過する時、ほとんど夜半の一時、驛長が、信號燈を振り上げる、此の刹那、青白い閃が私の胸中に飛び込んだ様な心持がした。其の時の静けさは死せる人の様であつた。……鳥栖へ着く。車夫の中村君や近所の久保山、原の兩君が迎へに来てくれてゐる。……母の容態

については只の一言も云はない。又聞きたうもなかつた。此の時駄目だつたな—と思つた。……眞の沈黙に落ちた……一二の挨拶を交はした後、ほとんど無言のまま車に乗つた。降りしきる雨と強く吹く風の中を、それはそれは田の様な泥の中を、もごかしい思ひをしながら家へと急いだ。もう此時は、矢張り、無心状態と云ふより外はなかつた。

(三) 悲みの極み

辻から山門と洗心閣の電燈が見えた。此時「ハッ」と思ふ下にまだ一縷の望みが湧いて來た。……山門を潜つた。母は定めて洗心閣に寝てゐるだらうと思ひつゝ、其の前を通るのが恐ろしい様な氣がした。「それは大病人の枕頭を通る様な心持」……それから小玄關から上つた。部屋へ通ると、家内と鳳龍とが挨拶した。彼等の眼には涙が流れてゐる、そのまゝうつむく、此のうつむける顔……噫、萬事休す。涙さへ出ぬ、手も足も氷つた。自分

ながら死んでゐるか生きてゐるか分からぬ。大廣間に待つてゐる主治醫の鹿毛先生、大學の東先生や、親類の誰や彼や、學舎の諸君が挨拶をした。主治醫から簡単な報告を聞く。そして夢現の中に洗心閣へ通る。ほのめく蠟燭の光、鼻に入る薫香の馨、白布被れたる母の顔、無言のままに坐はる、思はず「御母さん只今歸へりました」。「御母さんお悪いね」と云ふた。答へがない。返事がない。いつもの様な元氣な語尾に力のある暖かな「お、歸へつたな」のあの言葉が聞きたい。……されど母の姿には微塵の動きもない、毛ほどの揺ぎもない。おのゝく手に力を入れて、靜かに顔の白布を取り上げた。こはいかに、安らかな眠り、嬉しさうな微笑、今にも言云ひさうな其の唇、額に手をあて、鬢のほつれを撫で上げた。何んだか動き出しさうな姿されど尋ねれども答へず、問へども語らず、眼開かず、口動かす……嗚呼七十五年の長壽を保ち、ほとんど五十年の養育を受けし我が母、今や亡し……

……我は愈々孤兒となりぬ。今日より何を待まん、何に頼よらん……母逝いて孤兒の味ち今知りぬ。……かうして不孝の子の最後はこの悲惨な幕を以て終りを告げました。……兄弟や親類の挨拶を受けた時、初めて涙が流れた……噫々思ふも夢、談るも夢、書くも亦夢であります。此の涙の内夢の内に一切を超越した離脱した處の如來の大法、念佛の一道只此のみが輝いてゐます。

夢の醒めた時、涙の流れ行く所、それはあの御浄土であります、母の在します御親の國であります。積る不孝の数々は、此の御國にて御詫するより外に道はない事となりました。噫々懐かしき西方の淨刹……母のまします御國よ、……西方此處を去る事遠からず……實にあの御國が愈々近く成りました。實際「次の間」の様な感じが致します。

(四) なき骸の光り

東京の妹の來着を待つべく、苦心した。そこで寢棺を作る事にした……
…時候が時候だから防腐の事には一層の注意を拂ふた。二十一日夜半納棺の
式を終へた、大廣間に移した……、今は只東京の妹を待つのみである、
……一方……信徒の方では母生涯の功績に報ゆべく、寺葬と云ふ事に決
した、……悲しみの一夜は明けて二十二日と成つた。午後二時妹は着い
た。

硝子の蓋の外より母の遺骸へ對面した、……此の時母の顔には既に十二
分の死相を現して居た。私共に……無常亂壞、肪脹離散の哀相を示すべく
……、かくて母は其の行にをいて、又、其なきがらにをいて、最後の最後
まで、あらゆる教訓を遺してくれた。

(五) 密 葬

二十二日午後五時密葬……、それは母の平素の希望の如く、「さしものに」

烈しかりし雨の霽れ間に静かに、尊き埋葬の式を終つた。眺望の佳い、白い
砂の底に、ふりの佳い松林の中に、母の亡骸は永久の床に横たはつた。

(六) 最後の教訓

私の心に懸つたのは、母の病中と臨終の模様であつた、留守中の私への遺
言であつた。病苦の烈しい中から、何とも言へぬ、人間味と法悦との調和の
取れた尊き多くの教訓をのこした母は、此の私に、只一人の男子として又、
全責任を負ふた此の私に對して、遺言と云ふ遺言のなかりし不思議な一事で
ある……。

私は總ての人に尋ねた、……叔母も、姉も、妹も、妻も、坊も口を揃へ
て言ふた、(あなたには、只の一言も遺言はなかつた)只、「あれは、御本山の
御用の最中だから歸つて來るに及ばぬ」、「別れと言ふ事は、御法義のない人
の上のみある事だ」と云ふ事だけであつた。

……燃ゆる様な、あの温き心の持主であつた母が、……無論人間ですもの、私に會ひたくない事があらうか。私も亦一目、一言、人間として此の世に在る間の母に會ひたくて會ひたくて、そればかりの念願に、あれ程の苦心もした……さうだ……此の會ひたい會ひたいとの、やむにやまれぬ心を其のまゝに此の尊き無言の内に私に與へてくれた、……此の絶対の眞實愛には泣かすには居られぬのである。……二十一年前父が此の世を去りし時にも殆んど同一の教訓を與へられたが、今又、母に依つて此の尊い教訓を再びのこされた。それはかうである。……一寸考へて見れば、此の遺言のなかつたと言ふ事は、即ち、遺言する事のないと云ふ「絶対信頼」を現したのであるとも考へられるが、併しよくよく考へて見れば、此の「絶対信頼」と言ふ事は、同時に、「絶対責任」と云ふ事である。「お前には何も遺言する事はない」それだけ信頼して居るぞと云ふ事であるから、それだけ私に取

つては責任の重大なるを感ずるのである。……荒馬には、それだけ、「しつかり」した手綱がなければならぬ、「私は實際荒馬である。是れを見抜いた此の慈悲深き母が、最後の最後まで、此の「絶対信頼」と云ふ、大きな丈夫な手綱をつけてくれたのであつた。……兎角荒み勝ちな私、殊に此頃は總てに増長しつゝある。……露骨に言ふ事の出来ない程、物質的に墮落しつゝある、私の上に、この無上の教訓と、至愛の遺言とを残して呉れたと氣付く時に、私は實際に感謝の涙に咽ぶのみであります。

(七) 母の人となり

母は、若い時から、元氣で非常に氣丈な氣質だつた。身體も至つて強健で、暫らくもちつとして居る事が嫌ひであつた。

往生の五十二時間前……六月十七日の夕刻まで……元氣な念佛を唱へながら、降る雨もいとはず、裸足になつて境内の掃除をして居られたのだ、

口癖の様に云つて居られた如く、七十五年間を氣持よく働き通して行かれた。母は、お客のみわるのが、無性に好きだった、初めて来た人も、二度来る人も、どんな貴いお客も、たとへ乞食でも、山門を潜る人があつたら、吾が子が旅から歸へつた様に、孫共が来た様に、何も彼も忘れて之をもてなし、人々の喜ぶ顔を見て楽しんで居られた。之が爲に一度山門を潜つた人は、忘れがたい印象を受けるのであつた。之が直接に間接に人々の信仰生活の上について、影響する事は偉大なものであつた。

こんな風であつたから、門徒の人達は、丁度生みのお母さんの様になつて居た。

種々な境遇の人、色々な性質の人達が、皆んな懐しがつて居て下さるのを見るとき、母は、所謂清濁合せ飲み得る人であつた。つまり、母の人格は、平面的にも立體的にも幅が廣く厚さが深かゝつた人であつた。世の中

には、己は人の世話にならぬから人の世話もせぬと云ふ一種の人があるが、こんな人は、實際、幅がせまい厚味のない人で、それは寂びしい冷めたい人である。よくこんな人に會ふと、何時も反照的に、母を思ひ合すのであつた。

母は、こんな性質であつたので、社界的に働くのに極く都合が好かつた。人々は皆んな喜んで母の仕事に賛成もし加勢もして下さるのであつた。たとへば基山村の佛教婦人會が、明治三十七年に組織され、出征軍人の家族訪問から、戦地に慰問品を送つたりして、婦人の任務を盡し、また大正三年日獨戦争時には、出征軍人の家族を慰問する等、其他あらゆる公的事業に、盡したる事は數ふるにいとまがない。最近村内に在る戦歿兵士の墓參を年中行事の一つとして行はるゝ美風の起りたるを、喜んだのは一通りではなかつた。婦人會創立委員とし且つ會長として今日に及びたるも、此の人格の

現れであつて、人々が是れを知りて翼けて下さつたからだと思ふ。

(八) 人格の遺光

七月七日は門徒一同に供養の膳を出す日になつて居た。朝六時頃から、亡母さんの女同行達が、若き老い打ちませて二十人ばかり、膳部の仕出しに働いて呉れる。五六十名のお客を、一日中に、五六組も受けるのだから、其の混雑は仲々なものだ。御飯を焚くもの、お酒を温めるもの、色々仕度をするもの、膳に上げるもの、運ぶもの、お菓子を整へて出すもの、お給仕する者、下げるもの洗ふもの、まるで火事場の様な働き方だ。それが朝から夕刻まで引つ切りなした。そんな中にも一人として不平を云ふものもなく、念佛を唱へながら、骨身惜しませ働いて呉れる。夜に入つて後を済し、皆んなが佛前に詣うで、歸つて行く。

「お婆の様には、ほんにお世話になりました」

「どんな事をして上げてても足りませぬ」

純朴な人々から、此んな挨拶を受けるのも涙の種だ。

其の日の料理をした天本武一郎と云ふ、親切な同行が居る。歸へる時挨拶に来て、

「私は、昨日、御墓で一時間ばかり御隠居様に御話して行きました」と涙をふきく語るのであつた。

此の一人の門徒の人が、もの云はぬお墓の傍らに、腰を下して、煙草取出し、ぼつりくと生けるものと、語るが如く、思ひ出しては微笑を浮べ、感極まつては涙を流し、松吹く風の音を聞きながら、時の経つのも忘れはて母と話をして歸つたのだ。

「歸へりましてから、或る事柄であまりの事で腹が立ち、ウムウツと、立ち上からうとしました時、ふとお慕で今のさきまでお隠居様と話をした事

が思ひ出されて……」と歎歎きの下から、

「あゝ、死なれてもう此の世には居られぬ御隠居様に今も、お意見にあづかります……」

と泣きながら、六十にあまる人が話して呉れる。

お葬式の翌々日、御墓に参ると、棺の前に、みづく／＼しいダリヤの花が挿してある。御参りを済してから、あまりに奇麗な花だったので氣になつて、家に歸つて話して見たが、家の者には誰も上げたものがない、出入の者にきいたがわからない。

花は日毎に、代へられて行く……あゝ、主なき美しい花!!。

お前は、母の人格を、私に語つて呉れる。雄辯に物語つてくれる。噫、不肖な私、不孝な私は……。

(九) 追孝の志

亡母が、七十五年の生涯は、皆な私へ對する教訓であり、指針であり、其の行爲は悉く、私への模範であり、實物教育でありました。私は、これより私の一生を通じて是を實現せねばなりません。……寝ても覺めても私を離れぬ母の前に立ちて、私は、精神上的の亂想は、よし之を如何ともする事が出来ぬとしても、物質に現はれる行動は、絶対に、謹慎せねばならぬと、決心致しました。是が凡夫としてのせめてもの追孝だと思ひます。是を以て聊かでも、大悲傳化の任に當りたいと思ひます。謹んで、左の聖語を誦して此の稿を終ります。

直入彌陀大會中 見佛莊嚴無數億。

三明六通皆具足 憶我閻浮同行入。

大正十二年七月十日

貞猷法尼第三週日於洗心學舎 龍 叡

一四四
かくして私は今、七年前の追憶に耽つて死に安んじた私の母の面影を涙と
共に偲んでゐるのであります。

四 死を樂みし人

往生の信
念に安住
したる人
の特權

人々の死が苦しいといふ事は申すまでもない事でありまして、その苦しい
死を迎へて居る病人それ自身にとつては悩み、悶ねるといふ事が當然の事
であります。然るにこゝにたい一つ死を樂み得るといふものは、未來の光を
とめた所謂往生の信念に安住した人のみの特權といひうるのであります。
尤も極めて低級な迷信。假令ばかの支那人の一部殊にそれも貧しい者達が
もつてゐる再生の思想、死んだら必ずこの人間に生れ歸る者であるといふ信
仰から、その死ぬる場合に今度死んだら富貴なものに生れたいといふ望の下
に極めて落着いて悠然として微笑を含みつゝ終るものがあるのであるが、私
は迷信ながらも行手の光をもつて居る人たちには、斯様なともかく落着があ

死を樂む
こゝが當
然の歸結

伊藤貞子
の病中生
活

るといふ事を思ふと共に、眞實の信仰の上から、的確に未來の往生が信せら
れ今や親里に歸るところの門出といふ感じの上に立てる人々は、いよゝ立
つ事能はずといふその最後になつては、むしろこれを樂しむといふ事が當然
すぎる程の當然だと思ふのであります。

この一小著の底となつた水島先生にも亦私にも最も因縁の深かつた伊藤
貞子といふ人があつたが、この人は佐賀縣鹿島の人で地方の小學校の先生か
ら女學校の先生になつてたしか大正元年に二十五六歳位で死んだ人であり
ました。この貞子さんは、自分の最も親しい同じ女の先生の結核の病を親切
に看病してやつたために、自分もその結核に感染してたうゝそれがために
斃れた人であります。この貞子さんは斯様な譯で随分その最後はみじめな境
遇に陥つたのであります。それがためにこの人の念佛の信仰はます
ゝ麗しき法悦となつて輝いたのであります。この貞子さんの最後まぢかい

時の手紙に斯様な一節があります。

先生（著者の事）私はほんとうに幸福者で御座います。お蔭でだんくと病が進んで参りました。もう病の苦しみも、娑婆の苦しみも長い事ではあるまいと思ひます。ほんとにうれしいこと、思ひます。思ひまはせば、こゝ六ヶ年の間先生に、お父様の様に體から心の上までお導きを蒙り、お蔭様にて御浄土に参らせて頂くこと、ならせて頂いたことを改めて感謝させて頂きます。先生私は何んといふ幸福者で御座いませう。どうせ一度は死なねばならぬ私が、割合に苦しみの少いこの病にかゝりましたこと、それも私は私の最もよいと信ずる道に進まして頂きまして、あの死にました友達から人生的にも宗教的にも無上の感謝を捧げられたことを思ひますと、私にはその病が私に感染いたしました事にも更にうらみとてはもちません。尤も私は注意されるだけ、用心されるだけの凡てを

病に對する感謝

つくした後に受けたこの病氣ですもの、私は彼の人と私との上にかうならねばならぬ因縁があつたといふ事を深くみつめまして頂きましてから有難く感謝させて頂いてゐます。どうせ一度は死なねばならぬ身ですもの、仕合せな事には私には夫といふものがなかつたために、随つて子といふものも御座いませぬ。こゝになるご私は餘程責任が軽いのでありまして、尙又多くの人達が五十年六十年と長らく苦しんで、この人世の旅を續けてゆかれますのにひきかへて、私はまだ二十幾年でこの人生を終りますことは、丁度人様がそろそろと歩いてゆかれるのに、一飛びに汽車でゆく様に、この肺結核の汽車に乗つて、人世の旅を二十有餘年に済まして、我を待ち給ふ御親の御國へ行くと思へば、何んといふ幸福者で佛座いませうか、人様がみられたならば私の病室はみすばらしいもので御座いませう。私の境遇ははかないもので御座いませう。併しながら、多くの人達は人の世に生

病は私を
浄土に運
ぶの汽車

れ出でたる事が何のためであるかといふ意義の一つにも觸れず、たゞ徒らにあかし徒らに暮して居られる中に何たる仕合せで御座いませうか、人世は極樂に入るの門であり、病は往生を願ふたよりでありました。而して又私を浄土へ送る汽車でありました。先生有難ふ御座います。幾度も幾度もこの病の床をお見舞ひ下さいましたことを最後の最後まで感謝いたします。つもるお禮の數々はあの浄土で申上げる事といたします。南無阿彌陀佛……。

そして貞子さんは間もなくお浄土へと旅立たれたのであります。私ばかりして十有餘年前の思出に歸つて喜ばせて頂いて居ります。

誓了院の
臨終

私の父誓了院放麟は、かねて善導大師の「恒願一切臨終時、勝縁勝境悉現前」といふ句を悦んでゐました。さうして又常に私等へこの事を話しては教を垂れてゐたのであります。

これは申す迄もなくかねて、自分の臨終の時は極めて平靜に、ごうか尊い悦びの下にあのお浄土のことを思ひ浮べつゝ娑婆を終りたいと願ふて居ること云ふことであります。その通りに極めて安靜に又沸沸としてわくが如き法悦の下にこの世を終つたのであります。

死前二週間ばかり前に私に命じまして、

「煩惱は身心に逼迫するものであるから、もうこれからは病室の中では、念佛法話以外は一切之を禁じて呉れよ」

と申しつけました。

たしか死ぬる一週間ばかり前のことだつたと思ひますが、ひよつと目を開けて、何時の念佛よりも極めてさはやかな聲で高らかに御稱名を稱へて居つたが、にこつと笑ひながら枕邊の私達を顧みつゝ

「ごう考へてみてわしは幸せものだ、お前達の親切な看病と手ぬかりのな

い手當のもとにかうして靜かに病の床に臥してゐるのであるが、何んといふ有難いことであらうか、さうしてお前達がわたしが氣付かぬ様に／＼としてゐるけれども、私にはちやんと分つてゐる、この度の病氣はとても全快はかなはぬ。それで愈々今度といふ今度はお淨土參りをさせて頂くのだお前達の心盡しに對してはなんだか濟まぬ様な氣もするのだが、かうなると私はほんとうに死ぬることが樂しゆうてならぬ。後のことにも何一つ心配がなく、之ほどの親切な看護は受けるし、相當に病苦もあるけれどもそれも時々のごことで、苦しみ通しでもなく、お念佛を申すにも眞に都合のよい病氣で、どちらからも幸福者は私だ。

ほんとうに思ひ廻せば、今度は、迷から悟へ、苦しみから樂しみへ、娑婆からお淨土への引越してあり家移りであると思へば、死ぬるといふことがほんとに樂しみである。遊戯三昧といふ言葉があるが、こゝで息が絶

遊戯三昧

法然上人云はく

ゆればたつた今がお淨土、親様の膝下と思へば、死ぬるといふことも何んだか遊びたはむれるといふ様なまことに氣輕るな心持で、法然上人の「曉を待つ人は鶏鳴をよろこび淨土を願ふ行人は、病患を得てひとへに之を樂しむ」と仰せられた味ひもこんなものではあるまいかと、語りました。

さうして五日前に私に筆をとらせて、

『病苦は身に迫れども心は樂邦に遊ぶ、開目閉目、唯念佛のみ』

といふ句を書かせて之を病室に張らせたのであります。さうしてその最後の時はお別れの勤行を始むるや、朗々たる音聲を以て正信偈を調聲し、信心獲得の御文章を拜讀するや「煩惱を斷せずして涅槃をう」と讀みますと、大聲を上げて「有難い／＼さうであります、さうであります」とお受けをいたします。それから靜かに念佛と共に「お淨土、お淨土」と呼びながら、ほんと

に、につこり微笑を含んだまゝ、最後の息をひきとつたのであります。

私は死を樂しむ人の一章を筆にしなから、こゝにも亦追憶の涙にぬれてゐるのであります。左に記しておきますのは、父が十三回忌の正當の時の日記の一節と、その碑文とであります。

日記の一節（告白に代へて）

大正四年十一月六日、誓了院十三回忌正當、朝は五會念佛略法事讚を誦して、到彼自然成正覺、還來苦海作津梁、の文を讀みて、何れにか父が還相の身を拜せんことを希ひ、夕は初夜禮讚の偈を拜し、恒願一切臨終時、勝縁勝境悉現前、の句に至りて、父が平素常に此の句を味ひ、臨終の勝縁を願ひたりしが些の相違なく口に餘言を交へず、聲は念佛に限り、時に微笑を含んでそこにも見ゆるが如き極樂の莊嚴相を指して、往生の近づくを喜びし當時の俤を偲びぬ。

死前三日、床上の花を見て

御佛の法をはじめて菊の花

ながめてもよし、かきむでもよし

黄菊白菊の花さへ思出の種なるに、ましてこゝ吉野川の岸に沿ひたる山間の樹木のむらたち、庭國の結構、宛然たる吾が寺の有様なるも床かしく、風物寂寞たる秋の氣しんみりと襲ひ來る今日十一月六日午後六時過ぎ、寺の書院に過ぎし十三年の昔を思ふ我が袖は、時ならぬ時雨に沾ひぬ。

あゝ十三年前の今日只今、思へば「迫り來る刻々臨終の枕の邊りに集ひ居れる兄弟親戚が父の唱へ出せし調聲につれて御別れの勤行を營みし丁度の刻限なりけるよ

眼を閉づれば髣髴たる音容顯はれ來りて、告ぐるが如く、語るが如く、亦誨るが如く、夢幻恍惚の境に吾を忘れて暫時この思出をほしひまゝに味ひ

西方に在します父、念佛の聲に離れ玉はぬ父、之に反して没後の孝行のさ
 らに何者をも捧げ得ざりし事を思ふ時、我は只餘りの淺間しさに身の戰慄を
 禁することを得ざるものあり、この不幸不肖の我れ、幸ひにも天地の冥罰を
 免れて、こゝに十三回の忌辰を迎へ得しこそ不思議の中の不思議とも云ふべ
 けれ、まして父生前の同朋、兄弟、親戚、近く我れを周圍する朋友は尙我れ
 を捨てずして、篤き尊き賛助を與へ、さゝやかながらも一の紀念碑を建設し
 連枝智炬院臺下、篆額に筆を染め玉ひ、勸學前田慧雲和上碑文に父の遺徳を
 頌し玉ひしこと過分の光榮何物か之に加へん、此の四圍の恩恵に向て我れは
 實に何等感謝の辭を知らざるものなり、近く一ヶ月の向ふに開く可き五日
 間の紀念の法會には、父の遺友と一堂に會して其の昔を偲び、宇都宮に東京
 に萩に散在せる兄弟と、一室に集りて只一人の老母と二人の叔父母とを中心

に、樂しき團樂を作らんなど、過去の思出に泣き未來の想像に笑ひ、悲喜の
 涙を抑へて獨り旅窓に此の夕を送りぬ。

徳島縣美馬郡里西教寺に於て

龍 叙

碑 文

公名放麟、調氏、肥前國三養基郡基山村、眞宗因通寺第十二世寬量
 師長子也、妣原田氏、以弘化四年七月生、慶應三年得度、初習漢籍
 於荒木橋齋氏、學神道及國書於法蓮師、後就道晃宣正等諸師、研鑽
 宗乘、又親炙恒順和上、大凡七年、明治維新之初、竭力護法、頗有
 功績、六年某月、董第十三世席、設教學寮于佐賀、爲寮監、十年、
 選爲肥前國獎學係、十五年、奉宗主命、巡化京畿及紀伊國、爾來、
 東遊西巡、不遑啓處、三十五年、補二等巡教使、翌年七月、得病、

十一月六日、溘然逝、享年五十有七、宗主賜諡、曰誓了院、公資性
温良、行持謹嚴、道心淳厚、報謝無懈、其說法也、循々善誘、非使
人發信則不已、嘗奔走肥筑之間、闡明祖意、排祛弊執、到處靡然歸
向、遂結一社、號筑紫和合團、公之歿後有故解之、猶繼遺緒、法澤
倍盛、今茲十一月、將迎十三回忌辰、乃釀金、圖建碑以頌遺德、法
嗣叡公、寄書囑予銘、因銘曰、

自行化他、祖訓維遵、栖々遑々、不一爲身、噫嘻公乎、僧中之麟、

大正四年歲次乙卯十一月、龍谷勸學文學博士前田慧雲撰

連枝智炬殿篆額

かくの如く、その苦み惱む病氣をそのままに、往生淨土の行手の光を認め
ることに依て、却てその「死が」樂まれ、喜ばれる姿は、殆ど常識に受取れ

ぬか如き程の者であるけれども、眞實に、その往生が手に握られた如くに感
じられ、快樂微妙の樂土を憧憬する一念は、たしかにこの通であるはずと思
はれます、今一度繰り返します、「たゞ一つ死を樂み得るといふものは、未來
の光をみこめた所謂往生の信念に安住した人のみの特權である」と、南無阿
彌陀佛。

五 凡てに感謝して死を迎へたる人

凡ての病氣は我等の身體の自由を奪ひ、さうして健康な時の凡ての欲望を
剝ぎ取つて仕舞ふものであるから、こゝに凡てのものに對しての不足が
起つて來ることは當然であります。勿論、苦しむためには、不足も起るに違
ひない、氣も短くなるにちがひないけれども、そこにも矢張り煩惱即菩提生
死即涅槃の味を味ひうることが出来るのであります。即ち人間を人間として
又煩惱を煩惱として、不足を不足としながら、その度に御念佛の内にその一

一切の轉
化ミ淨化

一切が轉化され淨化されて行くところにその一切に感謝して行くことが出来るのであります。

一五八

新ヶ江君
子

私の聲社の同人でありました新ヶ江君子、それは京都高等女子専門學校研究科に居りました者で、憐れ二十三歳の春を後にして本年の二月七日にこの世を去つたのであります。私はこの君子の上にしみじくと凡てに對して、あらゆる感謝を拂ふてこの世を終つたものとしてこゝに申し上げてみたいと思ふのであります。

君子が聲社から離れて、富山縣高岡市の水島病院へ入院したのは昭和三年の五月二十二日であつた。私は二十一日の夜行で京都から君子を連れて高岡に行つたのである。さうしてその二十二日の夜高岡を立つて東京の井上侯爵家の家庭講話に行つたのであつた。さうしてその時東京から君子へ宛て、送つた手紙が次の第一信であります。

第一信

第一信

東京、麻布、井上侯爵別邸にて

龍 叡

君子、東京の一夜をこの井上侯爵の別邸に明しました、大變な雨とさうして寒さで幾度も目覺めました。その度毎に思ひは高岡の空へと通ひました。君子お前はさうしてゐるだらうか、定て今頃は樂な安らかなあの病室に何も忘れて眠つてゐるだらう、さうして昨日一日の経過が何うであつたらうかと、それからそれへと思ひ續けました。……あゝどんな因縁でせう、ほんとに兎も角何だか遠い所へ残した様な氣持がして仕様がな……聲社ならば、あれでも近い様な心もするの……然し是も何うしても、よくなしたい、よくなつて貰ひたいとの念願からであるもの、お前も辛棒して下さい、私達も我慢してその日を待ちます。

「精神の力」之です、生理的の自然を妨げざるものが精神の力 即ち信仰で

一五九

あります。哲學者古川老川は叫びました。

吾に三頼あり、三安あり、吾何をか悲しまん、何をか悶わん、何をか苦し
まん

病は院長に頼りて安く

未來は如來に頼りて安く

後事は家兄に頼りて安し

と……是だ——實に病に居つて病を忘れた處に、生理の自然のまゝに任す
ことが出来る。——佛の心を持てる院長水島先生は、温かき心持でお前の必
快を期して専心診療を誓つて呉れて居る。

御前は、只念佛して如來の慈しみの「ふところ」に包まれつゝ、一切を忘
れて、靜かに、その全快の日をお待ちなさい、いやその全快の日すらも忘れ
て、只その一日を自己の恵まれた一日と喜んで下さい。

生けらば念佛稱へなん

死なば淨土へ參らん

とても角てもおのが身は

思ひ累ふことぞなき

あゝたい仕合せを喜んで下さい。

昨日午後〇時十分、林六助君と恵比須驛から澁谷へ行く途中、道の傍で親
子夫婦が一團となつて、大掃除の廢物、即ち屑物を買ひ集めたものを選び分け
て居る。その又一方ではこの屑物の埃の中で晝食の辨當を取つてゐる貧民の
一團を見、林君に語つて「見物に來た御前と、此の貧民の境遇とを比較して
見た時、そこには餘りに吾等の恵まれた幸福がゆたかであり過ぎることを思
はずには居られぬではないか」と深く喜んだのである。君子、この様な恩恵
觀に立つた時、たい念佛せずにはゐられぬではないか——何ふして平靜な精

恩恵觀に
立ちて

神にかへらずに居られようぞ。

返すくも御念佛して下さい。さうして自分の與へられた幸福を感謝して下さい。さうして全快の日を待ち、この感激に立つて、その報恩の生活と感謝の聖業とにいそしむことを今より楽しんでゐて下さい。今朝一寸の時間を割いて私の感じのまゝを書いて見ました。南無阿彌陀佛。

(昭和三年五月二十五日午前十時)

合 掌

第二信

越へてその八月、君子を水島病院に訪ひ、その後能登の七尾町の相川鏡道君の寺から君子に宛てたものが次の第二信であります。

第二 信

石川縣七尾町にて

龍 叡

北國の残暑も矢張り烈しい、實際やりきれない程の暑さだ。流るゝ汗の内から涼風を見出し得る講座生活にひきかへて、お前のあの蒸し暑い病室はど

てもやりきれまいと思ふとそいろに涙が流れて来る。然し君子、日一日と順調に進んでゐるとの水島先生の御手紙を読んだ時、私はやはりほろりと嬉しい涙が出て来た。お前の涙が移つたのかしら……君子、御前は一切の生活を支配する身體の強敵と戦ふてゐる御前だもの、負てはならぬ是非勝たねばならぬ又勝たせねばならぬのだ。御前の將來の一切の運命はみなこの一二ヶ月の内にあることを忘れてはならぬ。坂を登るが如き毎日の攝生、一寸油断すればすぐにたちくゝと後戻りをする。その呼吸には實際同情に價する。然して學問も立身も結婚も理想の實現もみな健康にあることは申す迄もない。この一切がみな攝つてゐる御前の一日一日の療養、そこには、その一舉一動の凡てが御前の一生涯の基調を握りしめくゝりしめてゐるのだ。重大といはふか、尊貴といはふか、とても形容の出来ない重いゝ貴いゝものが籠つてゐるのだ。又一方から言へばその病院生活のまゝが矢張り一切生活の宿圖

病院生活

である。附添ひの婆やに對する心持は人を使ふ練習であり、院長の命令に服従して吾儘を抑へて行くのは順應生活の豫備教育であり、隣室の人達への交りは社會生活の豫習であり、看護婦達への思ひやりは同情涵養の道場に坐するものであるのである。かうなると、御前の今日は一面、病の療養と共に、一面好個の修養場であるのだ。そこに一點信仰の靈火が燃わ、如來の慈光が輝いてゐるのである。

思へば御前の今日ほど或る意味から恵まれてゐる生活はなからう。恩恵といふ心持から味へば、お前の周圍が御前を中心として動いてゐることを思ふ時、又慈しみの深い姉様達が全く母の如き心もて御前を見て居つて下さることを思ふ時、そこに直ちに幾年か前にお前を遺して見まかり給ふた御両親の心の内がしみぐと惚ばれて来て、私は私の身に引受けてこれが思はれて来る。かうして筆を走らせつゝ、涙に咽び念佛に泣いてゐるので。姉さんか

らの手紙が着いた。曾て御前の具合が悪かつた時「もうだめでないか知ら、いつ電報が来るかと毎日泣いて居つたのに、この頃は何日も喜んで喜んで、その健康の顔を見る日の近きことを楽しんで待つてゐます」との手紙を見ては、私は姉さんの心の内に入つた様な氣持がして、やつぱり私も嬉し泣きに泣かされたのであつた。

かうなると御前一人の上には、この幾多の生命と精神とが打ち込まれて居るのだ。御前一人の生きることが、この幾多の人の生きることだ。さうすれば御前の療養といふことは實に重大な責任があるのだ。だから御前一人からいふても周圍からいふても、ほんとに貴い尊い意味深いものがあることを忘れてはならぬ。それがまた一切衆生をわがひとり子の如く見て下されて居る如來の大慈悲心を頂いた我等の信仰の心の上につけて来る當然の感味であるのである。

宇宙を一大因縁の大集團と見、人世をこの因縁の小塊と見るとき、やはり御前と私と水島院長の如きを最も近き親しき因縁のものに見なければならぬ。別して突如として聲社の同人となり、何日とはなく丁度娘の様な氣にして仕舞ひ、ほんとに心置きなく隔てなくかうして御前の病氣療養に携はつて来て、ほんとに又可愛くてならぬ私自身を見出すと、矢張り何うしても一大因縁を感せずにはゐられない。それも御前に御兩親が居られないといふこと、それが私をして何時しか親の様な僭越な感じに捕へさせて仕舞ふた。さうして今日では何うして見様にも仕様のないことになつたことなど、思へば思ふほどただ不思議といふ外はないのである。私はたゞこの因縁の前に合掌するのみである。

何もかも永い長い久遠の昔からの流轉の旅の昔語をさせて頂くあの西方の親里を偲び憶れることのみが、吾等念佛を信する者の一大光榮であるの

である。(以下略) (昭和三年八月十九日七尾安樂寺客殿に於て)

かくして彼は總てに感謝しつゝ、昭和三年五月から本年の二月まで約九ヶ月間の病院生活を續けてこの世を去つたのであります。彼と私との關係や又彼が信仰上の變化や而して又その法悦感謝の有様は次の三篇に依てよく表れて居ることゝ思ふのであります。

君子と私

何と云ふても何と書いても、名残と悲さとは更に盡きない、君子があつた無邪氣な態度と素純な表情とは今更私を泣かせて止まぬのである。彼は佐賀縣の佐賀郡相應と云ふ處に呱呱の聲を上げ、佐世保の女學校を優等の成績で出てから、奈良の高等師範と京都の女子専門とを擇んだが、佛縁の深い彼は遂に京都の女專に入つた、私に因縁の出來たのは、聲社の行子君子と同級と云ふことゝ、尙大正十五年の八月「講演と音楽」の旅に加はつてその一行が

内田朝倉二十二の三先生と共に私の寺、佐賀縣基山の因通寺に一夜の休養を取ることになったのが抑もの初まりで、彼や是やが遂に聲社の同人として仕舞ふたのであつた。さうして其の最も私をして離れ得ぬ様にならしめたのは、この君子に兩親のなかつたと云ふこと、尙其の求道の志の厚かつたことであつた、それがいつとなしに子供の様な心地から遂に子供としか思へぬ様にならしめ、彼もまたいつとなしに「御父さん」と呼んで居る内にはほんとうの「御父さん」のやうにして仕舞ふた。いつも甘へた様に「おとうさあん美味いもの頂戴……」それが二十三とは言へぬ程子供らしかつた、お前は御嫁になる様な年でなんとそんな子供らしい事を言ふだらうね——私、御嫁には行かないの……何時までもお父さんの傍に子供で居りたいわ……これが殆どいつもの君子の口癖であつた——さうして御慈悲の話になると、何時でも涙と共に合掌して目を瞑つて念佛して居つたあの儼があり——と浮

んで来る、齒切れのよい御念佛の聲が今に耳の底に残つて居る。さうして一時は自力らしい念佛に力を入れて居つた時であつたが、高岡の水島病院で、「お父さん、私ね、間違ふて居つたの、御念佛を一生懸命に稱へて、ありがたい心持を作つて行かふと思ふて居つたが、お父さん駄目ね——かうして病院に居つて閑のある體になると、却てその念佛が出来ませんよ、忘れ勝ちになるよ……やはりお父さんのいつも喜んで居られる「抱き上げたる母を頼りに」が一番ありがたいのね、「忘れても忘れぬ彌陀がある故に、忘るゝものをこの身このまゝ」この歌が一番ありがたいのね——」と喜んだ。その姿が私の目の何處かに刻みついて離れぬのである。かうして君子はその望み通り最後迄「私の子供として」さうして「御嫁にならずに」忘れても忘れぬ親に守られて「彼は微笑みつゝ、その清き二十三年の生涯の幕を閉ぢた嗚呼。

(二一、二三、於豊前安雲光林寺 龍叔手記)

あの清く美しくかつた二十三年の生涯を此の世に残して……君子は一足先きへ御親の國へと急いだ。父でないところの父として君子の最後をかうして取扱つた私自身の上に、自分の子供以上の可愛さと悲しさがびしつとこたへる、高岡の水島院長が俄に九州帝大の大学院へ研究に來られる事になつたので豫後の甚だ不良な君子を何うするかについて相當に悩んだ、君子本人は勿論この水島院長の手から離れたむなかつた。この可否全部の決定を任すこの電報を手にした時は、さすがに迷ふた……けれども萬一の事があつたとするならば……君子の望み通、生れた故郷に近き福岡で、然も彼が數回ある意味の郷里として夏の休にも冬の休にも、幾度かあの清らかな聲で歌ふた私の寺の近くで死なせたいと云ふ心から福岡大學病院へ入れることにきめた、一月十九日夜水島先生と共に福岡へ着いた、翌二十日午前八時頃、宇美町の海

軍採炭部の講演會場から急行して大學病院の病室で君子に會ふた、随分やつれが見へて居たにはさすがに泣かされた、九大工學部の山口君や法文學部の田中君等がその信仰の上からの心からなる温情が何とも云はれぬ程嬉しかつた……しかし何となくその死が豫感される程その顔の何處かに寂しさがひそんで居る様に見へた。「おう君子、お前の顔は一寸もかはらぬが、手は大分やせたねー」その手を取上げて見ると、君子はにつこりと笑ふて、「御父さん、でも元氣でせう、きつとよくなるよ……」「さうともよくならいでどうする……また來るよ、落着いて御念佛を喜びなさいねー、」君子はいつもの齒切れのよい力ある聲で……「ハアーいつも喜んでゐるよ……ほんとに嬉しい、御父さんの御處が近ふなつたからな」……こんな話をしてその日は分れた……二十一日、二十二日、二十三日の三日間は自坊での大法會でこの法會に水島先生が參詣せらるゝ、その歸りに御佛前の御供への御菓子と密

柑や柿などをことづけた。これをほんとに喜んでくれたさうである、二十五日午前九時林六助君と家内と三人でその病床を見舞ふた、大變に喜んで……大きな聲で色々な話をして非常に元氣な模様をして居た……しかしその眼の氣力がなんとなく衰へて居た……私はいつになく、しんみりとした御慈悲の御話をした……水島先生も一緒であつた……「君子御父さんはこれから一寸京都から東京へ行つて來月の八日か九日には必ず歸つて來る、聲社の同人へも御前の元氣な事を話すよ、さうして歸りにはきつと御土産を持つて來るよ……」「ハイ待つて居ます、ねー、たんと御土産を持つて來て下さいねー……」「これが最後の言葉であつた……二月七日、東京井上侯爵邸で、ケサ六ジキミコシスとの電報を手にした時……呆然として言葉も出なかつた——あゝ君子が——あゝ君子は死んだか……その前日、聖上陛下から久邇宮家へ御見舞として御下賜になつた御菓子松平子爵の奥様から頂い

てあつたので、これを御土産に仕様と思ふたことが今は仇となつた……あはて、七日の夜行から八日の夜半に吉塚に着いた山口君に迎へられて、大學病院の死體室でその白蠟の様な、けれど微笑んで眠れる、やせのあどさへ見へぬ、その額に手をあてた時……「君子お前は、はかない運命だつたね……おつゝけ御浄土で會はうよ」と言ふたものゝ何うしても涙が出て、それから後は言へなかつた……今一遍あの清らかな聲が聞きたかつた……これも愚痴である……御土産にと持つて來た。聖上陛下から久邇宮家への御下賜の御菓子はその葬式の時に御佛前へと御供へして、せめてもの思ひやりとした。昭和四年二月十日白く降りつもれる雪の因通寺でその葬儀を営んだ。微妙院釋淨薫法尼……これが君子のこの後の名である。庭前の白雪、お前は君子のあの微妙に淨らかに薫じ亘つたその二十三年の生涯を語つて呉るのか……と思はず叫んだ……南無阿彌陀佛。

(龍叡合掌)

臨終記

臨終記

次にあげたところの山口宗夫君のものされた「君子さんの死」の一篇は君子の臨終記ともいふべきものであつて如何にその凡てに感謝してこの世を終つたか、明かにされてゐると思ひます。

君子さんの死

九州帝國大學工學部 山口 宗 夫

新ヶ江君子さんと僕とのこの世での交りは、たつた二十日間にすぎなかつた、それにその僕が、君子さんの美しい死を書き残す事になつたのは、何と云ふ不思議な因縁であらう。

君子さんが、水島先生に連れられて福岡に來たのは、一月二十四日の午前二時頃であつた。その日の午前九時頃調和上に連れられて宇美町の海軍探炭部から大學病院に來て初て君子さんに紹介されてから、その立派な態度や美しい心に惹かれて時々お見舞に行つて居た事から、調和上に促されて今日調

和上の御寺である因通寺での、お葬式に會はせて戴いたのである。

君子さんはほんとうに幸福な人であつた。形の上では両親を失ひ、その天稟の俊才も之を現はすに由なく病魔の捕虜となつてたつた二十三年でこの世を去られたが、しかし慈愛極まりなき調龍叡和上御夫妻をお父さんお母さんと呼び、佛醫者といはれる水島先生からは肉身の妹の様にはぐ、まれ、病床には北國の高岡から遙々九州の地までもついて來てくれたありがたい念佛信者の山村のおばさんに介抱されて、自分の胸には美しい信仰の火を耀して自らもよろこび人をも導き、今では日頃の望みかなつてあの安養の御浄土に生れた幸福者である。

君子さんは僕にこんな事を言つた。

「私はほんとうに幸福者だと思ひますわ、世の中がすべて私にいゝ様にとなつて行く様な氣がしますの、皆さんが親か兄弟の様に親切にして下さいます

し、行く先々で又色んな深切な方々にあひます、今度はどんな方に遇ふかと、それが樂しみになりますの。私が若し病氣にならなかつたら、佛様のお慈悲がわからなかつたでせう、體が弱くつてよかつたと思ひますわ、皆様にはすみませんが』

然し君子さんとても若い人間の子であつた。やはり人間としての弱味は始終つきまどつていた。それでこそ又彼女の死を細々と書き止める價值があるのだ。

君子さんは此の大學病院で、その初めに這入つた氣持のいゝ一人部屋から都合で他の人の澤山居る部屋に追ひこまれた時にはやはりいやだつた、そして今までこんなに大勢の病人と一緒にこんなに事務的に取扱はれたことのない君子さんはどんなにか、又もとの一人部屋に歸つてゆつくり休みたかつた事だろう。之から附添の山村たきさんの涙ながらの話筆に上す事にする、

君子さんの病氣が段々むづかしくなるにつれ、水島先生は氣が氣でならなかつた。先生は君子さんはとてもたすからぬといふ確實性が多くなればなるほど、どうにかして今のうちに其れとなく知らせておかねばならぬと思つて居られた。君子さんはやつぱりなほるなほると思つて居るのではないかと云ふ様に考へられてならない。言はう言はうと思つて居られる中に、とうとう其の機會が來た。

その二月二日とうとう其の願ひの一部分がかなへられて窮屈な四人部屋から一人部屋に移されたのである。しかしもとの明るい方でなく廊下のつきあたりにある暗い部屋であつた。もとの部屋といふのは急患の人が入つて輸血だ、注射だと大騒ぎの最中であつたが、その日とうとう甲斐なくなられたらしい、水島先生が君子さんをだつこして部屋をかへて下さつて、君子さんもやつと一安心してベッドに横たはつてゐると、すぢ向ひ側の部屋から其の死

んだ人の奥さんの泣き聲がもれて来る。扉一つへだてた所だから手に取る様に君子さんの耳に響いて来る。君子さんは耳をそばだてながら

「先生向ひの方はどうなさつたのですか」と聞いた。先生は今だと思つたので

「わゝ、あれはね……あの人はどうどう死んだのですよ、……しかしね、おかしなもんだね、人が死んだらあんなに泣かねばならぬものだろうか、人は一度は死ななくちやならぬものだが、……自分なら泣かんがね。僕には可愛い子があるが、あれが死んだつて泣きはしないよ、泣いたつて死んだ者はもともごりはせんからね、死んでから泣いたつて何にもなりはせんよ」

この信仰に厚い、さうして慈愛深い水島先生は、君子さんに餘所ながら死の宣告を與へたい爲に、心にもなき強い強いこの話をされたのであつた。

「……………」

君子さんは、顔を半ば夜具の中にかくしたまゝだまつて先生の顔をみつめて、一言も發しなかつた。

「どうかね、そんな時はあなたも泣くかね、まさかね……………しかしどうだろうかね、泣きはしないかな」

「……………」

君子さんは何んとも答へず、目をつむつて了つた。水島先生はいつまでたつても君子さんが口を開かないので、これ以上聞くわけにも行かず仕方なしに室を出て行かれた。

一寸用たしに出た附添のおばさんは、そんな事があつたとは一つも知らず、それと入れちがひに部屋に歸つてきた。ふと見ると君子さんの額には汗が一ぱい出てゐる。そしてなんだか息つかひがはげしくて苦しさうである。おば

さんはびつくりして、

『どうなすつたのですか、どこかわるいのですか、まあずい分……』
と聲をかけるど、君子さんはつぶつてゐる眼をはつと見ひらいて、

『あゝ苦しい、一寸、一寸汗をふいて頂戴』

と、うは言の様に言ふ、おばさんもどきつとして、すぐに手拭を出して體中しつとりと出てゐる汗をふいてやつた。胸をふいてゐると君子さんの心臓がはげしく働悸を打つて居るのが分る。

『どうしたのですか、まあ……先生を呼びませうか』

『わゝ、すぐ先生を呼んで下さい』

『ちやあ、すぐ行つて來ます』

おばさんが電話で先生をよんで歸つて來ると

『いらつして』わゝ、すぐいらつしやいますよ』

『あゝ苦しい、一寸看護婦さんもよんで頂戴』

おばさんは、あまり君子さんの苦しみ方がはげしいのでどうなる事かと一人で胸をいためていたが、かゝりの先生も見へて、一通り手當がすむと發作もその中におさまつてしまつた。ところが翌日の夕方になると又昨日と同じ發作が起つて來た。汗が出る、働悸がする、呼吸が切迫する、何とも云へず苦しさうである。おばさんは氣になるので一通りおさまると、とう／＼思ひ切つて、

『あなた、どうなすつたのですか、夕から急にこんなに苦しがつて』
と聞くと、

『水島先生があんな事をおつしやるから』と昨日の出來事を話して

『だから私何だか死ぬ様な氣がしてね』

と胸のくるしみを打ちあけた。おばさんは云つた。

『あなたはそんなに死ぬのがおいやですか』

『だってまだ死ぬのはいやだわ、死にたくはないわ』

あゝなんと云ふかはいさうな事だ、さうあろう、……さうあろう……おばさんは涙をおさへながら、なぐさめるより外仕方がなかつた。

『まあ、あなた、さう死ぬ／＼つていつて氣にせんでもいいではありませんか、死ぬなんてそんな事を……、しかし天子様だつて九條武子様だつてやつぱりおなくなりになつたぢやありませんか、だからあなただつて無常の風が吹いて来ればそれは死なぬとは言へませんよ、しかし死ぬとも言へんぢやありませんか、そんな事を氣にしてどうなさいます』

君子さんは涙をたゝへた目で、おばさんの顔を哀願する様に見上げながら、

『私はほんちに死なねばならないのでせうか』

『……ね、おばさん、私はまだ生きていたいよ』

おばさんは聲を立てずにはゐられなかつた。此れ以上もうどうして強い事が云へ様か、あゝいちらしい、何と云ふ因果だらう、何と云ふ因果だらう。僅かに取つて二十三の妙齡な娘だもの、女子専門の研究科を今一息で卒業といふ時だもの。死なせたくない、どうにかしてあげたい。まだうら若いこの方が死にたくないのはあたりまへだ、おばさんはもうこらへることが出来なくなつた。おばさんはかう云ふより外はなかつた。

『おちつきなさいませ、ねー、あなたも御信心家にも似合はない事をおつしやいますね、調和上のお話をきいていつもお浄土をよろこんでいらつしやつたあなたではありませんか。』生けらば念佛となへん、死なば浄土へ参らなん』といつもおつしやつていたではありませんか、おわすれになりましてたか。それに死ぬときまつた事ではなし、さあさすつてあげませう』

おばさんはかう云ふより外はなかつた。されど見れば見る程病人とも思へ